令和５年度奨励共同研究助成課題

全国高等学校総合体育大会運営に関わる高等学校生徒のモチベーション向上に関するプログラムの検討

（代表研究者）　スポーツ指導学科　　佐藤文亮
（共同研究者）　スポーツビジネス学科　粟野祐弥

目次

プロジェクト発足の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
プロジェクト推進会議の進行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
大学生スタッフの養成～モチベーション構築編～・・・・・・・・・・・・・・１５
第１回プラカーダー養成研修会～モチベーション構築編～・・・・・・・・・１８
令和 5 年度全国高等学校総合体育大会 総合開会式式典プラカーダー養成研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
大学生スタッフの養成～歩行練習会編～・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
第２回プラカーダー養成研修会～歩行練習会編～・・・・・・・・・・・・・・３１
リハーサルの様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
総合開会式の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
高校生のモチベーション向上の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
事前調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
事後調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６

プロジェクト発足の背景

高校生の健全な発育発達を促すために、体育・スポーツ活動の普及と発展を図ることは重要であるが、その中で、学校教育の一環として行われる部活動は、その教育的意義が高いことも指摘されている。全国高等学校体育連盟では、「高校生の健全育成を目指す」、「競技力の向上」、「生涯スポーツ実践の基礎づくり」という３つの柱の実現を目指す上で、高校生にとっての部活動が果たす役割を勘案し、昭和３８年に第１回全国高等学校総合体育大会を開催した。全国高等学校総合体育大会（以下「全国高校総体」という）は、規模及び内容において高校生最大のスポーツの祭典として、各学校の運動部活動推進の原動力に発展しているが、その果たす役割は、教育活動の一環として高校生に広くスポーツ実践の機会を与え、技能の向上とスポーツ精神の高揚を図るとともに、高校生活動も含め生徒相互の親睦を深め、心身ともに健全な青少年を育成する欠かせないものとなっている。この健全な青少年育成の視点は、競技者として参加するもののみならず、競技者を支える運営側の立場として参加する高校生においても同様の意義を持つ。高校生が運営側として参加する場合にはボランティアとしての関わり方が一般的であるが、世界の高校生と比べて日本の高校生のボランティアに対する参加経験や興味関心が低いことが報告されている（国立青少年教育振興機構、2021）。60 年近く続く全国高校総体においても、高校生が開会式でのプラカーダー歩行業務をはじめとした多くのボランティア業務に参加しており、2023 年度には、北海道高等学校体育連盟主導のもと、36 年ぶりに北海道で開催・実行される。これらの活動が高校生にとって有意義な教育的機会とするために、ボランティアに参加する高校生の動機付けやモチベーションの向上を図ることで、より効果的な健全な青少年育成につなげられると考えられる。また、大学卒業後に社会に出る大学生が、高校生に対するボランティアへの心構えやチームビルディング指導などを行うことで、未来の日本社会を作る人材育成効果が期待できる。

上述した背景をふまえ、北海道高等学校体育連盟と札幌国際大学が連携し、高高校生・大学生にとって有意義な教育的機会を創出することを願い、本プロジェクトを発足するに至った。

はじめに

現在の日本の高等学校教育課程は学習指導要領によって大きな影響を受けるが、2011 年から実施されている新しい指導要領では、「生きる力」の育成が強調されている。文部科学省では、「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の知・徳・体をバランスよく育てることの重要性を掲げており、特に、１）基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質能力、２）自らを律しつつ、他人とともに強調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、などを述べている。そのため、学校教育における総合的な学習の時間では、豊かな心や主体性の確立に向けて、ボランティア活動を含めた様々な取り組みがなされてきている。

ボランティア活動には、「自発性：自らが率先して行動し、自分の意志で行動を起こす要素」、「非営利性：対価を求めず、行為の高潔さを重視する要素」、「公共性：他者あるいは社会に何らかの意味で役に立つ要素」の 3 つの必要条件があるといわれている（内海と中村、2014）。その他にも、「創造性：自らが工夫をして新たな活動を作り出す」、「先駆性：社会の様々な課題に率先して関わること」、「相互性：ボランティアをする人と受ける人の互恵的な関係」などが含まれている（内海と中村、2014）。教育場面においてボランティア活動を取り入れ、主体性を持って取り組んだ場合には、高校生に上記のような要素を身に着けさせることが十分に期待できる活動である。

しかしながら、ボランティア活動に対しての意欲や興味関心が、世界的にみても低い現状にあり、特に日本においては諸外国と比較しても低い傾向にある。コールズ（1995）は、米国の大学生が勉学を子どもに教えるボランティア活動の意義を質問されても答えられなかった事例を報告している。国立青少年教育振興機構が行った調査（2021）では、社会福祉に関して興味関心を示さない日本の高等学校生徒の割合は、男女ともに、米国・中国・韓国の高等学校生徒よりも低いことが報告されている。また、社会参加についての考え方でも、「自身の社会参加により、変えてほしい社会現象が少しでも変えられるかもしれない」や「高校生でも社会をよくしていけると思う」という質問項目に対して、肯定的な意見をもつ割合が、最も低いことが報告されている。すなわち、ボランティア活動参加による高等学校生徒への教育的意義は大きいものの、実際に高等学校生徒が活動に参加するためのモチベーションを向上させない限り、その活動に伴う教育効果は向上しないものと考えられる。

動機付けはモチベーションの語訳であり、その語源はラテン語の「動くこと」

（movere）からきている。基本的に意味する内容は人の行動を駆り立てることであり、行動の活性化といえる(西田、2013)。学術用語としての動機付けは「行動を喚起し、持続させ、一定の目標に方向付ける心理的過程」と定義されている。動機付けに関する概念として「動機付けられた状態とは特定の対象に対する気持ちの変動を意味しており、目標に向けてやる気になっているということを指している。一方で、対象に対しての衝動や興奮が感じられない場合のことを動機づけられていない状態である」と説明している(Ryan and Deci, 2000)。人の行動に影響を与える心理的な概念として、「やる気」や「意欲」という言葉がよく用いられるが、これらの概念は、人の日常生活と密接に関わっており、人の行動に大きな影響を与えるということが分かっている(深山、2013)。また、スポーツなどの練習や試合でも、やる気を持って積極的に取り組む場合とそうでない場合では、技能の向上や成績に大きな差となって現れるように、物事の成果を大きく左右することになる(伊藤、2004)と述べられていることから、モチベーションとパフォーマンスは深く関係していると考えられる。これらのことから、特定の対象に対して感化され、モチベーションが高まることが、その後の行動につながっていくと考えられる。さらに、そのモチベーションを維持することで目標に対する努力の継続が可能となり、結果としてパフォーマンス向上に影響するということが考えられる。

Deci and Ryan（1985; 2000）の自己決定理論（Self-Determination Theory）によれば、モチベーションは、無動機(amotivation)、内発的動機付け(internal motivation)、外発的動機付け(extrinsic motivation)という3つのカテゴリーに分類している。無動機(amotivation)とは、ある刺激や活動に対して全く動機付けが起こらないことを指し、行動と結果における随伴性を認知しない状態である。内発的動機付けとは、目的に対する本来的な興味や楽しさから特定の行動が起こることである。外発的動機付けとは、本来の目的以外のさまざまな成果を期待して特定の行動が起こることであるとしている。外発的動機付けは、さらに、外的調整（External regulation)、取り入れ的調整（Introjected regulation)、同一化的調整（Identified regulation)、統合的調整（Integrated regulation）の4つの段階に分けられている。1つ目の外的調整(external regulation)は、物的報酬の獲得や罪を回避することを目的とした動機付けであり、外的な要因によって行動が調整される。誰かにやれと言われたから行動することや、やらないと怒られるからといった理由から行動が起こる場合などが該当する。2つ目は取り入れ的調整(introjected regulation)であり、依然として外的な要因に起因するも、やや内在化（自己の外部にある価値や調整を取り込み、自己と統合すること：岡田, 2010）がみられ、外的な統制がない場合であっても行動が生じる。例として、恥をかきたくないからや、仲間外れになりたくないからといった

ことが挙げられる。3 つ目は同一化的調整(identified regulation)であり、行動の価値を自らと同一化させるとともに、その重要性を認識し自律的に行動する性質をもつ動機付けである。自分の目標のために行動したり、重要性や必要性を理解し取り組んでいる場合などが代表的な例である。4 つ目の統合的調整(integrated regulation)では、ある活動や行動に対しての同一化が自己内において、その他の活動等から得られる価値や欲求と矛盾することなく統合がなされた状態となる。行動が自らの価値観と一致している場合や、その優先度が非常に高い場合などがあてはまる。これら一連の動機付けは、自己決定性の一次元上に付置され、自己決定性の低い極には無動機(amotivation)があり、自己決定性の高い極は内発的動機付け(intrinsic motivation)となる。また、その間に外的調整(external regulation)から統合的調整(integrated regulation)までの外発的動機付けが位置している。これらのモチベーションのタイプによる動機づけは、様々な局面におけるパフォーマンスの質に大きな影響を及ぼすことが明らかにされている。すなわち、自己の外部にある価値や調整を取り込み、自己と統合することで外発的動機付け(extrinsic motivation)を精緻化し、内発的動機付け(internal motivation)との間に連続性をもたせることができる (Deci and Ryan, 1985;2000)。このことは、自己決定性の比較的低い状態(外的調整、取り入れ的調整)であったとしても、研修プログラムのアプローチ方法を工夫することにより、モチベーションをより自己決定性の高い状態(同一化的調整、統合的調整)へ変化させられることを示唆している。

また、上述した自己決定理論は、自己決定性の概念に基づき、スポーツ参加における積極性(Wang & Biddle, 2001)から職業選択(Guay et al., 2003) 、選挙への投票行動(Losier et al., 2001) など様々な領域における動機付けやモチベーションについて、包括的な理解を可能とするための理論的枠組みを示している。これまで、自己決定理論に関する研究では、動機付け尺度を用いて多くの相関研究が行われてきており、学習やスポーツ、対人関係など様々な領域を越えた共通のフレームワークとして適応的に関連することが明らかにされてきている(Vallerand and Ratelle, 2002)。このような背景に照らし、本研究のプログラムにおける高等学校生徒のモチベーション向上についても、同様の概念的フレームワークをふまえた動機付けに配慮するとともに、可能な限り内発的動機づけ(intrinsic motivation)、またはより自己決定性の高い(self-determined)動機付けにつながるような働きかけを行っていくことが重要であると考えられる。この働きかけとはすなわち、本ボランティアに参加する意義を明確化するとともに、仲間と共に反復して歩行練習を行うことによる活動自体の楽しさの向上を意味する。

歩行運動は姿勢の安定を維持しながら、下肢運動を周期的に繰り返すことに

より同時に身体を前進させる運動であり（Perry and Burnfield, 2012)、もっとも高度に自動化した運動である（中村ら、2003)。歩行運動は、高い位置に存在する重心の斜め前下方への落下運動を利用し、支持にあたる下肢の丸みのある関節の前方への回転運動を発生することによってなされる。併せて、遊脚となる下肢を前に踏み出し、落下してくる身体を支えることが繰り返しなされる（藤原、2011)。ゆえに、歩行周期は、大きく立脚期と遊脚期に区分される。単脚にて立位姿勢を支持する際には、身体重心の支持側への移動があり、支持脚の下肢は骨盤に対して相対的に内転することになる。Gurfinkel ら（1976）は、立位バランスを維持するうえで、下肢に対する体幹・骨盤の位置関係がきわめて重要であることを指摘しているが、歩行のおいても単脚での支持期における下肢に対する体幹の位置関係の調節は重要となる（藤原、2011)。その位置関係とは、体幹と股関節を伸展した姿勢を指す。また、Massion（1992）は、姿勢外乱が生じた場合、身体各部位の運動が相互に影響を及ぼしあうことになるが、その影響が小さくなるよう、自動的なサブプログラムによるシナジィ的な姿勢制御がなされることを報告している。このような運動を行う場合、その遂行に向ける意識の程度が異なることがあるが、Paillard（1960）は、運動技能の習熟過程を自動化と関連させて説明している。すなわち、運動の学習の初期には、大脳皮質などの上位中枢を動員するための精神的な緊張があり、全身の筋緊張が認められる。運動を繰り返す過程でこの全身的な筋緊張が減少し、変わって視覚や固有受容器からの情報を基にしたフィードバック制御がはたらき始める。このフィードバック過程の中では、歩行運動のために必要な空間的な知覚や時間的な知覚を複数の感覚情報を用いて行っている（大山ら、1994)。プラカーダーの行進のように、日常生活において頻繁に行われるものとは異なる様式にて歩行運動を行う際には、複数の感覚情報をもとにしたフィードバックを用いて学習することにより、より効率的な運動学習が行えるものと考えられる。

新たな歩行様式を学習する際には、上述した下肢と体幹の位置関係のほかに、歩幅（ストライド）と歩調（ピッチ）を調整することが重要である。ストライドを調整するためには、ミニハードル、アジリティスラッツ、マーカーなどをある間隔に設置して、その間を歩行していくトレーニング方法が頻繁に用いられる（鈴木、2020)。そのストライドにてピッチを調整するためには、同様の練習方法を用いて、素早く足を回転させる意識を持ちながら歩行することとなる。ただし、このような特異的な感覚フィードバックがない状況でのピッ

チ修得方法は、陸上競技経験者によく用いられる方法であり、未経験者が同様の状況で練習をする場合には、運動学習が困難となる。そのため、未経験者がピッチを調整する際には、音刺激のような感覚情報を与えて、練習を行うことが効果的と考えられる（Kunita et al., 2011)。したがって、本研修プログラムでは、プラカーダー未経験者が効率的に歩行様式を修得できるようにするために、アジリティスラッツと音刺激を組み合わせた練習方法を取り入れることを考案する。

本プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、全国高校総体運営ボランティアに参加する高校生の動機付けやモチベーションの向上を図り、より効果的な健全な青少年育成へとつなげるために、大学生主体の課題解決型プロジェクトを展開することを目的とする。大学生においては、高校生のボランティア参加に対する意識調査やモチベーション向上に関する事前学習などを行って課題を抽出し、ボランティア参加に対するモチベーションが向上するための研修機会を構築・実践することで、汎用的な能力および課題解決能力の向上をはかるものとする。

プロジェクト推進会議の進行

本プロジェクトの推進にあたり、北海道高等学校体育連盟と札幌国際大学の間で、2 回に渡り、プロジェクトの具体的進行内容について打ち合わせがなされた。

第 1 回目のプロジェクト会議は、4 月 27 日（木）に、北海道札幌白石高等学校にて開催された。6 月には、白石高等学校にてボランティア参加にあたっての心構えを教育する事前研修会を、7 月には、札幌国際大学にてプラカーダー歩行練習会を開催する旨を確認した。また、7 月に令和 5 年度全国高等学校総合体育大会北海道実行委員会にて開催する総合練習会（3 日（月））、リハーサル（20 日（木））、総合開会式（22 日（土））の日程についても確認した。詳細な打ち合わせ内容と、配布資料については、下記に示す。

～詳細な打ち合わせ内容～

令和 5 年度全国高等学校総合体育大会

総合開会式プラカーダー養成研修会打ち合わせ会議　議事録

日時：2023 年 4 月 27 日（木）17:00~
場所：札幌白石高等学校
出席者：駒井（札幌白石高等学校長兼北海道高等学校体育連盟会長）、永田（札幌白石高等学校教頭）、阿井（札幌国際大学）、粟野（札幌国際大学）、佐藤（札幌国際大学）

（全て敬称略）

・会議に先立ち、北海道高等学校体育連盟と札幌国際大学の地域連携事業等に関する協定内容の確認がなされ、全国高等学校総合体育大会に参加する高校生ボランティアについて、ボランティア参加に対するモチベーションが向上するための研修機会を構築・実践し、また高校生に対するボランティアへの心構えやチームビルディング指導等に関わることで、高校生ボランティアの動機付けやモチベーションの向上を図り、より効果的かつ健全な青少年育成へと繋げることを目的に、連携していく方向で同意がなされた。

・駒井会長より、北海道教育委員会より提示された「令和 5 年度全国高等学校総合体育大会総合開会式プラカーダー養成研修会のスケジュールや実施内容の概略」について説明がなされた。
下記に主要な日程を記す。

・6 月
①事前研修会
IH ボランティアへ向けた意識付け
②実技研修会

事前研修(意識付け)をふまえてプラカード、歩行についての実技指導・確認
事前研修会は、白石高校と本学主導で実施し、ボランティアに参加する高校生がスポーツを支える立場としての意識づけができるレクチャーや、ボランティア当日の歩行方法の練習などを実施する方向性が話し合われた。実施時間帯は平日のいずれかで検討し、実施場所は本学キャンパス内(ボランティア参加者の高校－大学間のバス送迎含む)か、時間帯によっては白石高校にて実施する旨の話し合いがなされた。

・7 月 3 日（月）総合練習会
・7 月 20 日（木）リハーサル
・7 月 22 日（土）総合開会式当日
ほか、確認事項は以下の通りである。
・6 月と 7 月に複数回、ボランティア参加に関するモチベーションの変化に関するアンケート調査を実施する旨の確認がなされた。

・養成研修中の写真撮影について、研修中の撮影は問題ないが、総合開会式当日の写真撮影は、駒井会長から確認いただく旨の話し合いがなされた。

・ボランティアに参加する高校生は白石高校にて男女比問わず部活動単位や有志による募集をする予定であり、参加者が固まり次第、白石高校より本学に共有いただき、本学では、6 月の事前研修に向けたプログラムの検討を開始する旨の話し合いがなされた。

文責：佐藤

～配布資料～

令和５年度全国高等学校総合体育大会
総合開会式プラカーダー養成研修会について

１　目的

全国から訪れる多くの人々をまごころのこもった温かい「おもてなしの心」で迎えるとともに、全国 47 都道府県から参集する選手を、「輝く主役」として演出するため、プラカーダー養成研修を実施し、総合開会式に華を添える。

２　対象

札幌白石高等学校生徒 60 名程度　　※人選については、当該校に一任

３　実施内容

(1)「令和５年度全国高等学校総合体育大会総合開会式開催要項」の内容に基づく研修（実技研修）

・歩幅は、65cm
・速度は、1 分間に 120 歩
・プラカードを支持する姿勢
・表敬区域での登壇者に対するプラカードの掲示

(2) 式典の運営に関する研修（式典研修）

・入退場手順
・担当選手団の誘導経路
・式典進行時の儀礼に係る所作手順

４　研修計画

６月（未定）　事前研修会（日時・会場調整中）
・概要説明（高校総体推進課）
担当内容の説明及び先催県実施状況の動画視聴
・実技研修（講師調整中）
歩行練習

７月３日(月)　総合練習会（北海きたえーる）
・実技研修（講師調整中）
会場での歩行練習
・式典研修（高校総体推進課）
会場における経路、役割、儀礼時の所作等について

７月 20 日(木)　リハーサル・ランスルー（北海きたえーる）
・式典音楽隊と補助生徒による模擬行進練習
・式典次第の確認

７月 22 日(土)　総合開会式当日

５　その他

・事前研修会の実施時期及び講師の人選については、当該高等学校と調整のうえ決定。

第２回目のプロジェクト会議は、6 月 7 日（水）に、北海道札幌白石高等学校にて開催された。6 月 15 日（木）に白石高等学校にて実施する予定となった、プラカーダー養成研修会当日の流れや内容について、打ち合わせがなされた。また、プラカーダーの歩行練習会の日程を 7 月 13 日（木）に札幌国際大学にて実施する旨の打ち合わせがなされた。詳細な打ち合わせ内容と、配布資料については、下記に示す。

～詳細な打ち合わせ内容～

和 5 年度全国高等学校総合体育大会
総合開会式プラカーダー養成研修会打ち合わせ会議　議事録

日時：2023 年 6 月 7 日（水）16:30~
場所：札幌白石高等学校
出席者：駒井（札幌白石高等学校長兼北海道高等学校体育連盟会長）、永田（札幌白石高等学校教頭）、阿井（札幌国際大学）、佐藤（札幌国際大学）

（全て敬称略）

・6 月 15 日（木）白石高等学校で実施予定のプラカーダー養成研修会の実施内容について打ち合わせがなされ、以下のとおりで実施することが確認された。
参加者：白石高校　生徒 53 名（もう 7 名を追加募集中）、札幌国際大学　学生 18 名
●15 時：白石高校入り、会議室へ（pp 模写、会場設営）
●15:45：研修会スタート（会議室。高校側で指定された 5-6 人グループごとに着席）
●冒頭挨拶（教頭先生他）5-10 分
●北海道インターハイにおけるボランティア活動実施に向けた講習会（横山先生）30 分
●アンケート調査実施（粟野先生）5-10 分
●グループワーク（佐藤先生）60 分
●17:15：研修会終了、解散
研修会にあたって、以下のことが確認された 1)：当日、国際大側は 4 台の車で移動し、施設内の指定の駐車スペースに停めること、2）研修会当日に報告書用の映像撮影や写真撮影は問題なしであること

・プラカーダーとして参加する高校生の歩行練習会の日程について話し合いがなされ、7 月 13 日（木）に実施する方向で同意がなされた。実施場所は、札幌国際大学とし、実施時間は、正午から夕方にかけて 1-1.5 時間程度行うことが確認された。
高校生の移動は送迎バスにて行い、詳細な送迎スケジュールは後日打ち合わせることが確

認された。

・7 月 3 日（月）、7 月 20 日（木）に北海きたえーるで実施予定の公式練習会のタイムスケジュールについて確認がなされた。
札幌国際大学からも教員と学生スタッフ数名が参加予定であり、7 月 13 日（木）の大学での歩行練習会用の写真や動画撮影の許可取りを駒井会長が行われる旨の打ち合わせがなされた。

文責：佐藤

～配布資料～

令和5年度　全国高等学校総合体育大会
プラカーダーの仕事について

1 プラカーダー

プラカーダーとは？→
7 月 22 日に北海きたえーるにて実施される総合開会式、選手入場時に都道府県名のプラカードを持っての行進やその先導をする横断幕等を持って行進する人のこと

2 スケジュール

6 月(期日調整中)　札幌国際大学の先生・学生による研修会
・スポーツボランティア参加の心構え
・プラカード保持の姿勢や歩き方の基本

7 月 3 日(月)　総合練習会 9:00～12:00 北海きたえーる
・実技研修(担当業務内容・会場での歩行練習)
・式典研修(会場における経路、役割確認、儀礼時の所作)
・バスによる送迎あり

7 月 20 日(木)　リハーサル・ランスルー(とおし練習)
9:00～15:00 北海きたえーる
・式典音楽隊と補助生徒による模擬行進練習
・式典次第の確認
・現地集合・現地解散

7 月 22 日(土)　総合開会式当日　7:00～13:00 北海きたえーる
・現地集合・現地解散

3 服　装

本番及びランスルー
本校制服　上衣　長袖 Y シャツ又は長袖ブラウス
下衣　夏用スラックス又はスカート
ニットベストは任意

第 1 回養成研修会は夏季略装も可とする。

4 その他

第1回養成研修会は学校往復のバスが用意されます。
第2回及び本番については交通費分の QUO カードが配布されます。

～配布資料～

令和５年度全国高等学校総合体育大会
総合開会式における個人情報及び肖像権に関する取扱い

令和５年度全国高等学校総合体育大会
北　海　道　実　行　委　員　会

令和５年度全国高等学校総合体育大会北海道実行委員会（以下「道実行委員会」という。）は、令和５年度全国高等学校総合体育大会総合開会式（以下「総合開会式」という。）の運営に当たり取得する個人情報及び肖像権に関する取扱いについて、次のとおり対応します。

1　個人情報の取扱い
(1)　総合開会式へ参加するための入場許可証の発行など総合開会式の開催及び準備に必要な業務に使用します。
(2)　総合開会式の円滑な運営を図るため、大会運営関係者及び関係機関に提供することがあります。
(3)　道実行委員会が主催する各種会議資料等に掲載されることがあります。
(4)　道実行委員会が所管するホームページ及び広報・報道に関係する資料等に掲載されることがあります。
(5)　総合開会式及び総合開会式の準備に関する行事に参加した場合、新聞・雑誌及び関連ホームページ等で公開されることがあります。
(6)　道実行委員会が作成する大会報告書（以下「報告書」という。）に掲載されることがあります。
(7)　総合開会式式典映像や場内アナウンス等により紹介されることがあります。

2　肖像権に関する取扱い
(1)　総合開会式及び総合開会式の準備に関する行事に参加した場合、報道機関等によって撮影された写真が、新聞・雑誌・報告書及びホームページ等で公開されることがあります。
(2)　総合開会式及び総合開会式の準備に関する行事に参加した場合、報道機関等によって撮影された映像が、中継・録画放映及びインターネットにより配信されることがあります。また、ＤＶＤ等に編集され、配布されることがあります。

3　対応について
(1)　取得した個人情報を上記以外で使用することはありません。
(2)　運営役員及び補助員等の大会運営関係者及び総合開会式招待者、観覧者は、個人情報の取得に際し、上記取扱いに関して、特段の御連絡・申出がない場合は、前記取扱いに関する内容を御承諾いただいたものとして対応させていただきます。
(3)　個人情報等の掲載又は公開等に関しての御質問は、道実行委員会事務局まで御連絡ください。

上述した打ち合わせ内容をふまえ、全国高校総体運営ボランティアに参加する高校生の動機付けやモチベーションの向上を図り、より効果的な健全な青少年育成へとつなげるためには、以下の視点からボランティア参加へのモチベーションを高める必要性があると考えた；１）本ボランティアに参加することにより高校生自身が成長する能力の明確化、２）プラカーダー独自の歩行法習得のような非日常体験を通じたコミュニケーション機会の創出。これらの点を考慮し、我々は、ボランティアに参加する高校生の心構えを意識づけるために、講習とグループワークを 6 月 15 日（木）に行い、プラカーダーの歩行練習を 7 月 13 日（木）に行うことを企画し、大学生を交えた計画準備の実行に移行した。

大学生スタッフの養成～モチベーション構築編～（6/12(月)＠札幌国際大学）

ボランティアに参加する高校生が成長する能力を明確化することで本活動に参加する意義を実感し、モチベーションを高めるような企画となることを念頭に入れて、その内容を検討した。そこで、6 月 15 日（木）の研修では、以下 2 つのコンセプトで、研修を企画した；1）札幌国際大学の大学生が過去に参加した東京オリンピックマラソンボランティアの体験談を高校生に伝えることで、本ボランティアに参加することで得られる学びに気づくきっかけを与えること、2）東京オリンピックマラソンボランティアの体験談を傾聴して高校生が得た学びについて、グループワークを通じて整理し明確化することで、高校生の動機付けやモチベーションの向上を図ること。1）の企画については、東京オリンピックマラソンボランティアの学生指導を行った経験を持つ、本学スポーツビジネス学科の横山先生に講話を依頼し、2）の企画については、佐藤と札幌国際大学スポーツ人間学部学生が担当した。

2）の企画については、6 月 12 日（月）に、大学生スタッフを対象とした事前打ち合わせを実施した。事前打ち合わせの冒頭に、本学スポーツ人間学部長阿井先生から、本ボランティアに高校生が参加することの教育的背景や、大学生が本研修に参加することの教育的意義について説明がなされた（写真 1)。

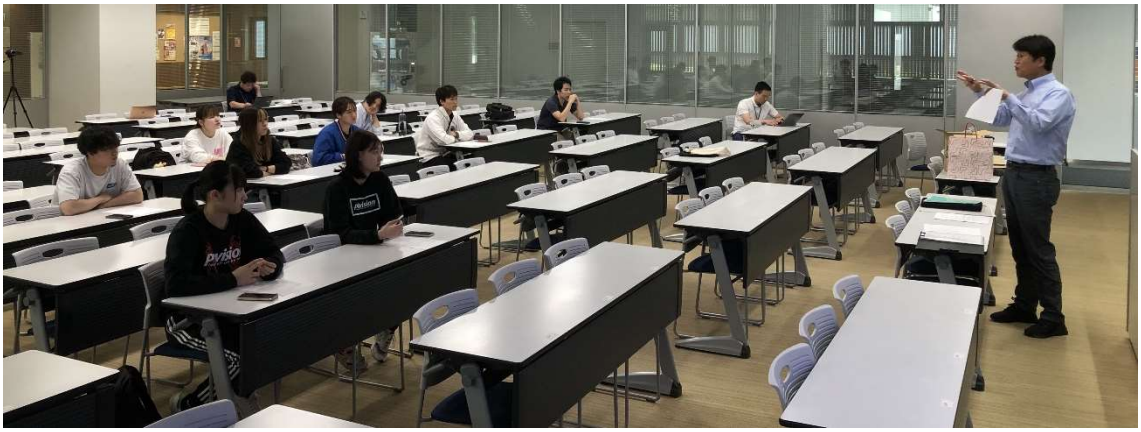


写真 1

6 月 15 日（木）の研修のアウトラインは下記のとおりとなった。
●15 時：白石高等学校到着
●15:45：研修会スタート
●冒頭挨拶（永田教頭先生他）
●東京オリンピックマラソンボランティア参加の講話（横山先生）
●ボランティア参加にかかる事前アンケート調査実施（粟野）
●グループワーク（佐藤、大学生）
●17:15：研修会終了、解散

アウトラインの説明後、横山先生より、講話の概要について説明がなされ、グループワークにて高校生に重視して伝えるポイントを確認した（写真 2)。

写真 2

次に、高校生とともに取り組むグループワーク案について打ち合わせを行った（写真 3)。グループワークでは、①自己紹介をふくめたアイスブレイク、②ボランティアによって身につくと思われる要素の整理、③KJ 法によるアイデアの整理、④Y チャートによる研修のまとめ、のような進行をする案とした。打ち合わせの後、大学生は、グループワーク案を予行演習した。グループワークを予行演習した後、進行案をもとに、大学生は、高校生の動機付けやモチベーションの向上につながるよう、高校生とのコミュニケーション方法を熟考した。

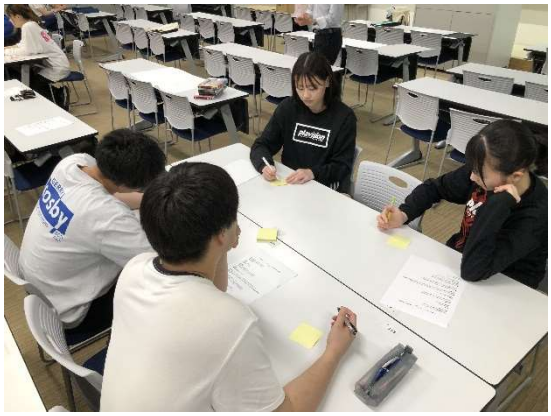


写真 3　研修プログラムの考案する様子

第１回プラカーダー養成研修会～モチベーション構築編～（6/15(木)＠北海道札幌白石高等学校）

研修会当日は、15 時頃に白石高等学校に到着し、会場準備を行った。ボランティアに参加する高校生が会場入りする前に、大学生スタッフとともに、座席配置の確認と、グループワーク用資料のセッティングを行った。15 時 45 分前には高校生が会場入りし、予定時刻通りに研修会がスタートした。研修会には、57 名の高校生（男性 10 名、女性 47 名）が参加した。

研修会は、6 月 12 日（月）の事前打ち合わせ通りに、進行することができた。講話では、東京オリンピックマラソンボランティアの体験談を真摯に傾聴し、本ボランティアに参加することで得られる学びを考えるきっかけを得ることができている様相だった（写真 4)。

講話の終了後、高校生は、事前アンケートに回答した。アンケートへの回答が終えた後、高校生は、初見の者同士でグループを組み、グループワークに参加した。最初は、緊張状態にあったものの、大学生を交えたアイスブレイクを通じて会場の雰囲気は、徐々に活気に包まれていった（写真 5)。

写真 4

写真 5

講話を傾聴して得た学びを整理するタームでは、大学生スタッフのアドバイスを受けながら、グループワークを進行していた。最初は、大学生の誘導をもとにワークが進行する様相であったが、徐々に高校生同士が意見を出し合うようになった。グループワークの中盤から終盤にかけては、高校生が中心となってワークが進行し、大学生はワークの進行を見守る程度にまで発展できている様相だった（写真 6)。

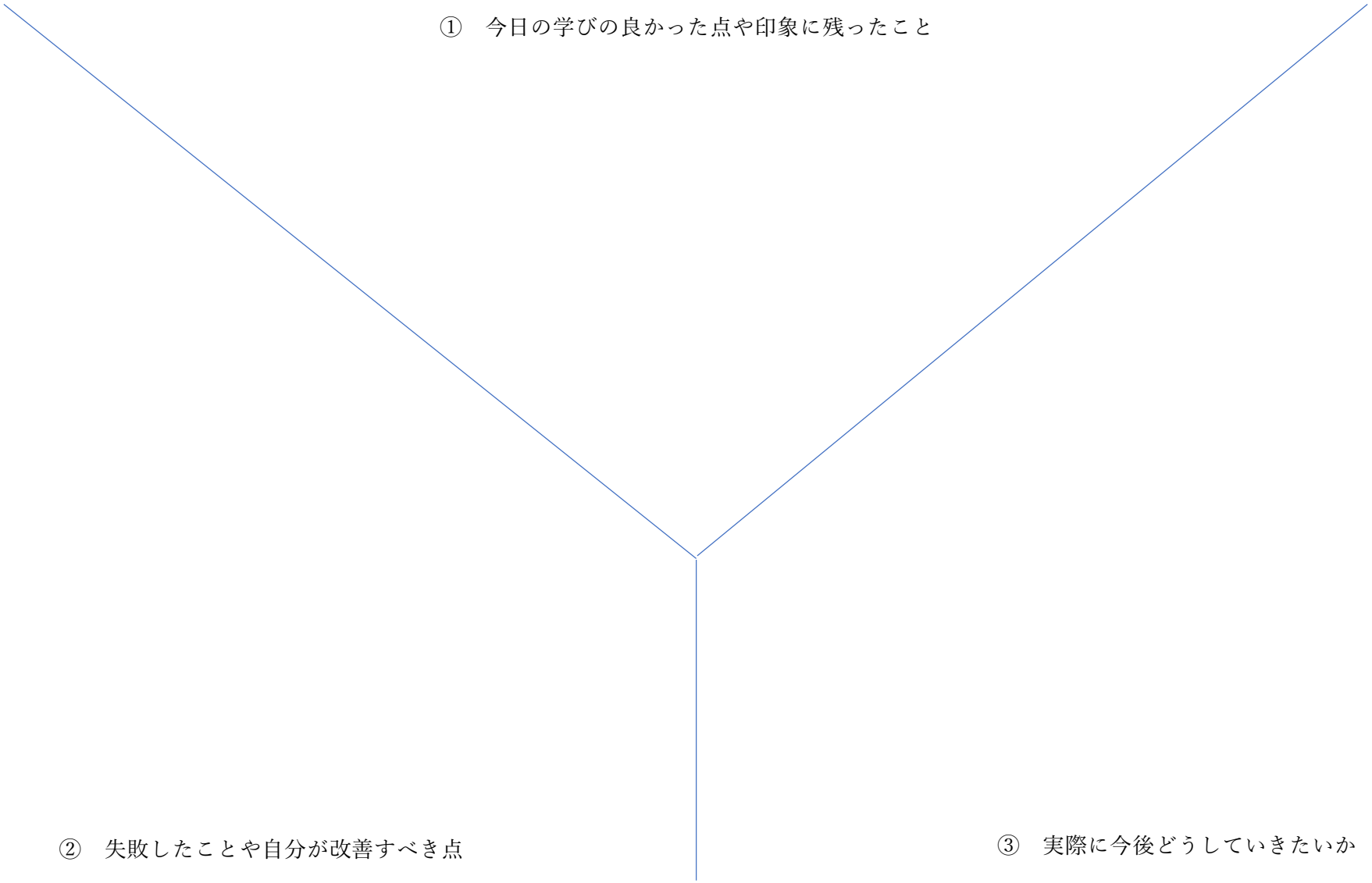
写真 6　グループワークの活動風景

ワーク終了後には、Y チャート（図 1）をもとに、感想を記述してもらった。感想の抜粋を下記に示す。

① 今日の学びの良かった点や印象に残ったこと
・緊張したけど大学生の方々や違う学年と話すことができて楽しかった。 ・自分がプラカーダーの仕事でやりたいことをまとめることができてよかった。 ・人によってどのような思いや気持ちで取り組みたいのかが違うことを知ることができた。 ・ボランティアというものは、選手のためでなく、自分に自信を持つためでもある。 ・ボランティアは何のためにやるのかわからなかったから、目標ができてよかった。 ・大学生の方がたくさん笑顔で話しかけてくれて楽しく活動することができた。 ・責任感を持つことが大切だと思った。 ・ボランティア活動に対しての自分の目的を明確にすることができた。
② 失敗したことや自分が改善すべき点
・沢山案を出せなかったので、次にこういう機会があったら沢山案を出せるようにしたい。 ・まだ初対面の人と話すと緊張するので改善したい。 ・もっと自発的に意見を言えばよかった。 ・もっと意見を言ったり、発言したりする。 ・何のためにボランティアに参加したのか考えられるようにし、意味のあるものにする。 ・慣れるまでに時間がかかるので、このボランティアを通じて自分を変えられるように楽しんで活動がしたい。 ・自分から意見を出せなかったが、もう少し幅広い意見を出すべきだったと思った。 ・言われていないことも自分で考えて思いやりを持って行動する。
③ 実際に今後どうしていきたいか
・何事も一生懸命楽しんで活動したい。 ・みんなと笑顔で仲良く話せるように、本番緊張しないで取り組みたい。 ・今日出た目標をもとに協力しながら楽しく活動していきたい。 ・グループワークで話したことを意識して、本番に向けて頑張る。 ・気持ちの問題もあると思うので、今後の自分のためにできることをやっていきたい。 ・目標を意識して練習に取り組んで自信を持って本番を迎えたい。 ・意見をただ出すだけではなく話し合いも自分から参加できるようにしたい。 ・責任感・協調性を意識して周りに目を向けるようにしたい。

今回の研修会を通じて、ボランティアに参加する高校生の動機付けやモチベーションの向上を図る良いきっかけとなったように考えられる。今後は、今回の活動内容で得た学びと、7 月 3 日（月）に令和 5 年度全国高等学校総合体育大会北海道実行委員会主導のもと実施されるプラカーダー養成研修会の内容をあわせて、7 月の歩行練習会の企画内容を考案していくこととした。

図１：Ｙチャート（今日から使えるワークショップのアイデア帳Part4 29より抜粋）



令和 5 年度全国高等学校総合体育大会　総合開会式式典プラカーダー養成研修会（7 月 3 日(月)＠北海道立総合体育センター北海きたえーる）

令和５年度全国高等学校総合体育大会北海道実行委員会主導のもと、7 月 3 日（月）に、北海きたえーるにて、プラカーダー養成研修会が実施された。実施要領は下記のとおりである。

令和５年度全国高等学校総合体育大会
総合開会式式典プラカーダー養成研修会　実施要項

１　趣　旨

令和５年度全国高等学校総合体育大会開催基本方針に基づき、「高校生が輝く」総合開会式となるよう、活気あふれる行進誘導により式典の進行を円滑にするための技術向上を目指す。

２　主　催

令和５年度全国高等学校総合体育大会北海道実行委員会

３　日　時

令和５年（2023 年）７月３日（月）９：００～１２：００

４　会　場

北海きたえーる（北海道立総合体育センター）
（札幌市豊平区豊平５条 11 丁目１番１号　TEL011-820-1703）

５　参加者

式典プラカーダー（札幌白石高等学校）　57 名

６　日　程

9:00	9:10	10:00	10:15	11:00	11:45	12:00
開会式	研修①	休憩	研修②	研修③	閉会式	

７　内　容

(1) 開会式
・日程説明　等

(2) 研修①
・プラカーダーの役割
・プラカーダーの作法
・行進練習　等

(3) 研修②
・行進動線の確認
・行進練習　等

(4) 研修③
・入退場の練習（式典音楽隊、先導隊との合同練習）

(5) 閉会式
・次回日程の説明　等

当日、白石高等学校の高校生らは、午前 9 時に北海きたえーるに集合し、2 階の中研修室へ移動した（写真 7）。

写真 7

中研修室へ移動後は、全国高校総体総合開会式式典プラカーダー引率担当者から、全国高校総体の歴史と概要、プラカーダーの役割や歩き方などを、資料と過去の開会式式典の映像を交えながら説明を受けた。終始和やかな雰囲気の中、高校生らは過去の映像に興味を示し、真面目な姿勢で説明を傾聴していた（写真 8、9）。

写真 8

写真 9

その後、各都道府県のプラカードの担当決めを行った。高校生の自主性を考慮し、白石高等学校サイドにて、挙手制でプラカードの担当決めを行った（写真 10、11）。あわせて、各都道府県のプラカード担当の他に、先頭プラカーダー、アリーナ誘導係、横断幕係も選出した（写真 12、13）。

写真 10

写真 11

写真 12

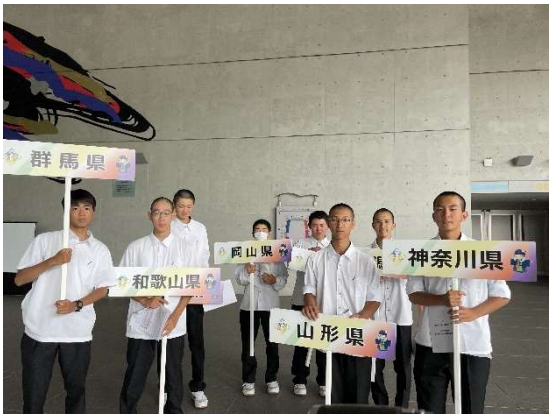


写真 13

各都道府県のプラカーダーが決定した後、高校生らはメインアリーナに移動し、開会式での入退場ルートのおおまかな確認と、プラカードを持った状態の着席姿勢の簡単な講習を行った（写真 14）。講習時の歩行の様相は、7 月 13 日（木）の歩行練習会に活用するために、ビデオカメラにて撮影を行った。

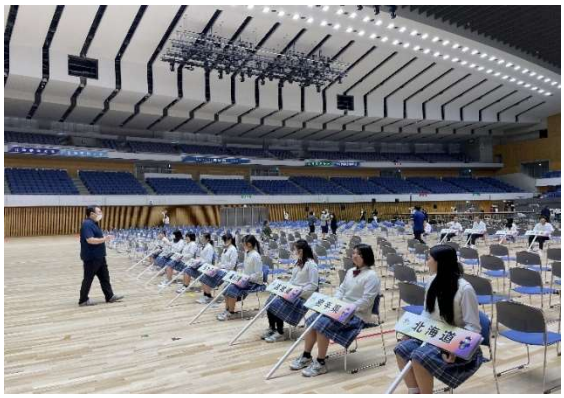


写真 14

その後サブアリーナに移動し、プラカードの正しい持ち方の講習と、掲げたプラカードの高さを均一に揃える練習を行なった。初めはバラバラだったプラカードの高さも、練習後には綺麗に揃えることができ、高校生らの成長が伺えた。（写真 15、16）

写真 15

写真 16

全体の講習会が終了後、簡単なアンケートの回答と次回予定の確認をして 12 時頃に解散した。（写真 17、18）

写真 17

写真 18

大学生スタッフの養成～歩行練習会編～（7/10(月)＠札幌国際大学）

6 月 15 日（木）のプラカーダー養成研修会の内容を経て、高校生に対してボランティア参加に対する心構えを構築した。次に、プラカーダーの役割を担う高校生は、プラカードを手に保持した状態での歩行方法を習得する必要があるため、それらの練習プログラムを検討した。練習プログラムの検討にあたり、全国高校総体総合開会式におけるプラカーダーの歩行方法にはいくつかの規定が存在するため、それらを考慮する必要があった。その規定については、下記に示す。

① 歩幅は 65cm とし、歩行速度は 1 分間に 120 歩のペースとすること

② プラカードは、左手でその下端を握り臍付近で構え、握りこぶし 1 つ分あけて持つ。右手は、顎の下端部付近の高さにある柄を持つようにする。プラカードが前後左右に傾かないよう、地面と垂直にかつ身体と平衡を保つようにする。

また、総合開会式にて高校生が歩行するコースを、図 2 に示す。

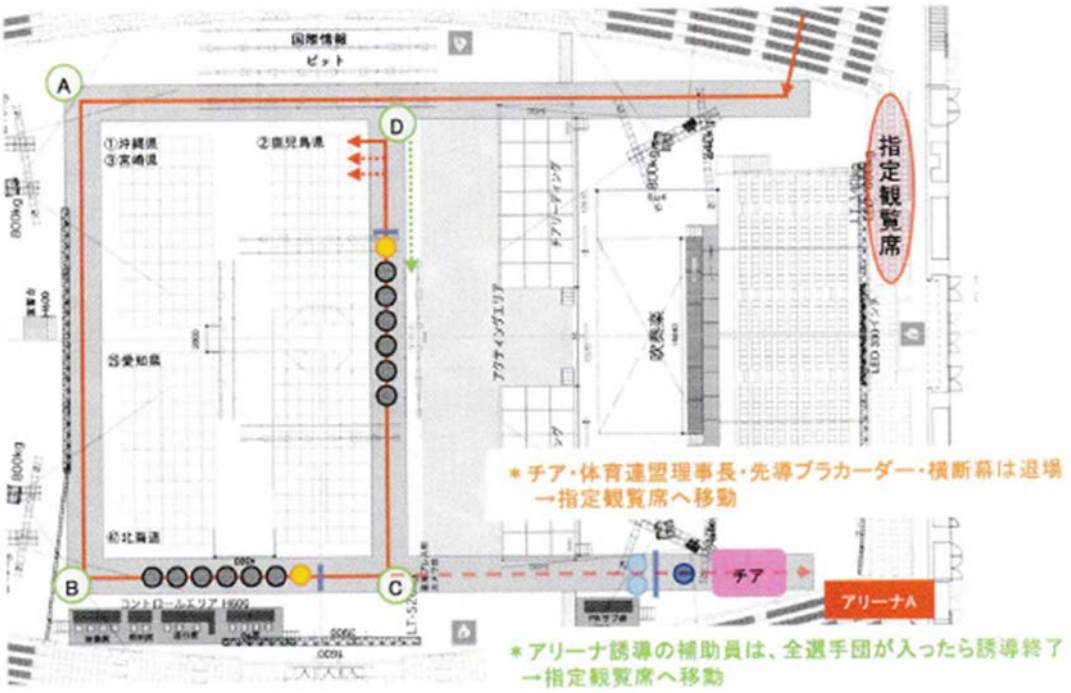


図 2　総合開会式におけるプラカーダーの歩行コース

高校生は、主に、プラカードを持ちながら、直線コースと、4 つの角を直角に曲がるコースを交えた、会場を周回するコースを歩行する必要がある。

上述した歩行方法を考慮に入れて、下記のような練習案を企画した。歩行練習方法の監修・指導は、粟野が中心となって行った。

～歩行練習の指導案～

今回の歩行練習会にあたって、高校生が規定の歩幅、および歩行リズムを身につけ、より美しいフォームにて歩行することが可能となるよう、練習プログラムを作成した。プログラムの内容、およびそのねらいは下記の通りである。

1．　その場足踏み(左右交互に 10 歩程度ずつ)　【5 分】

(意識すべき 5 点、耳・肩・腰・膝・くるぶしが直線上に位置するよう背筋を伸ばす)

はじめに、正しい姿勢についての説明(悪い例のデモンストレーション含む)を行う。列の近くどうしでペアを組ませ、正しい姿勢が取れているか確認し合う。運動学習の初期(新しい運動の習得時)は、主に運動者の内的部分(身体)に意識を向けさせることが望ましいとされる(Castenda and Gray, 2007)。一方、運動学習が進んだ段階においては、運動者の外的部分(外的指標、比喩的で抽象的な表現など)に意識を向けさせることで、前者の場合と比較し、運動パフォーマンスが向上することが報告されている(Castenda and Gray, 2007)。

2．　正しい姿勢で直線を歩く×4 本(アリーナを往復して行う)　【7.5 分】

最初にプラカードの持ち方を考慮せず、自然な歩行を行う。静止状態で練習した動きを身体の移動がともなった中で意識できるよう練習する。合わせて、他の人の歩行も観察し、お互いに指導し合うなど、さらに動作の理解を深めていく。

3．　正しい姿勢で(+歩幅 65cm を意識して)直線を歩く×4 本【7.5 分】

次に、規定の歩幅である 65cm に歩幅を合わせて、歩行を行う。その際、一人ひとり身長や下肢長が異なるため、大きく姿勢が崩れない範囲を意識させ、無理に規定の歩幅に合わせなくても構わない旨、指示を行う。この指導については、事前に全国高校総体の運営等を指揮する北海道教育委員会の指導スタッフのアドバイスをもとに、プラカーダーによる歩行を全体的により美しく見せるため、歩行のリズムを優先することが目的である。

4．　正しい姿勢で(+歩幅 65cm とリズムを意識して)直線を歩く×4 本【7.5 分】

歩幅に加えて、規定の歩調(120/m)での歩行練習を行なう。始めに、メトロノームを使用し、規定の歩調(120/m)を確認する。続いて、その場でリズム(120/m)に合わせて足踏みを行なう。最後は、実際に規定のリズムに合わせて、歩行練習を行なう。歩幅練習の時と同様に、一人ひとり、身長や下肢長も異なるためうまくリズムと合わせられるよう意識させながら、練習を行なう。規定の歩幅を意識しながら、リズムを合わせることとなるため、より複雑で難しい運動となる。そのため、一人ひとりの歩行の様子を動画に

て撮影しながら、1 回 1 回フィードバックを行い、自らの歩行運動を客観的な視点から確認し、課題を抽出しながら練習を行なう。

5．　休憩【5 分】

6．　正しい姿勢で(+歩幅 65cm とテンポを意識して）直角を歩く(特殊コース)×5 本(1 人ずつ）【10 分】

7．　正しい姿勢で(+歩幅 65cm とテンポを意識して）直角を歩く(特殊コース)×5 本(隊列にて）【10 分】
(横断幕プラカーダーの練習も含む)
プラカーダー入場から、着座位置まで開会式時に規定される導線に沿っての歩行練習を実施する。先に実施した歩行練習や規定の歩幅、歩調で歩行を行いながら、開会式時の導線では、直角での方向転換が加わるため、より美しく進行方向の転換を行うための動作や意識すべきポイントを確認し、実際の導線をアリーナ内に再現し、入場練習を行なう。入場練習のまとめとして、各県の代表プラカーダーが入場順に整列し、本番と同様のタイミングでリハーサルを実施する。その際、リズムの確認およびモチベーションの向上をねらい、メトロノームでのリズム音、実際の入場曲を流し緊張感を高めるようにする。図 3 のように、入場時と退場時ではやや導線が異なることから、入場時と退場時で異なるポイントの説明を行い、それぞれについてリハーサルを実施する。

8．　まとめと振り返り【5 分】
最後に、歩行の歩幅、およびリズムをはじめ、より美しく歩行するための姿勢づくりのポイントや、直角での方向転換、入場時と退場時の導線について異なる点などを口頭の説明にて、全体的に振り返りを行なう。また、改めてプラカーダーとしての参加意義を確認するとともに、開会式当日へ向けてモチベーションの向上を図るための激励を行い、歩行練習会のまとめとする。

上述した歩行練習において、高校生をおおよそ 10 人 1 グループ計 6 グループに分けて指導を行う案とした。また、大学生スタッフ 14 名を 1 グループに 2-3 人ずつ分け、各グループの高校生の歩行の様相を動画に撮るようにし、高校生にフィードバックを与えるような案とした。

歩行練習会に先立ち、大学生スタッフと事前打ち合わせを行い、当日の指導内容を説明するとともに、プラカードを持った歩行方法の練習を行い、高校生の歩行の様相を撮影した際にフィードバックすべきポイントを確認した（写真 19)。

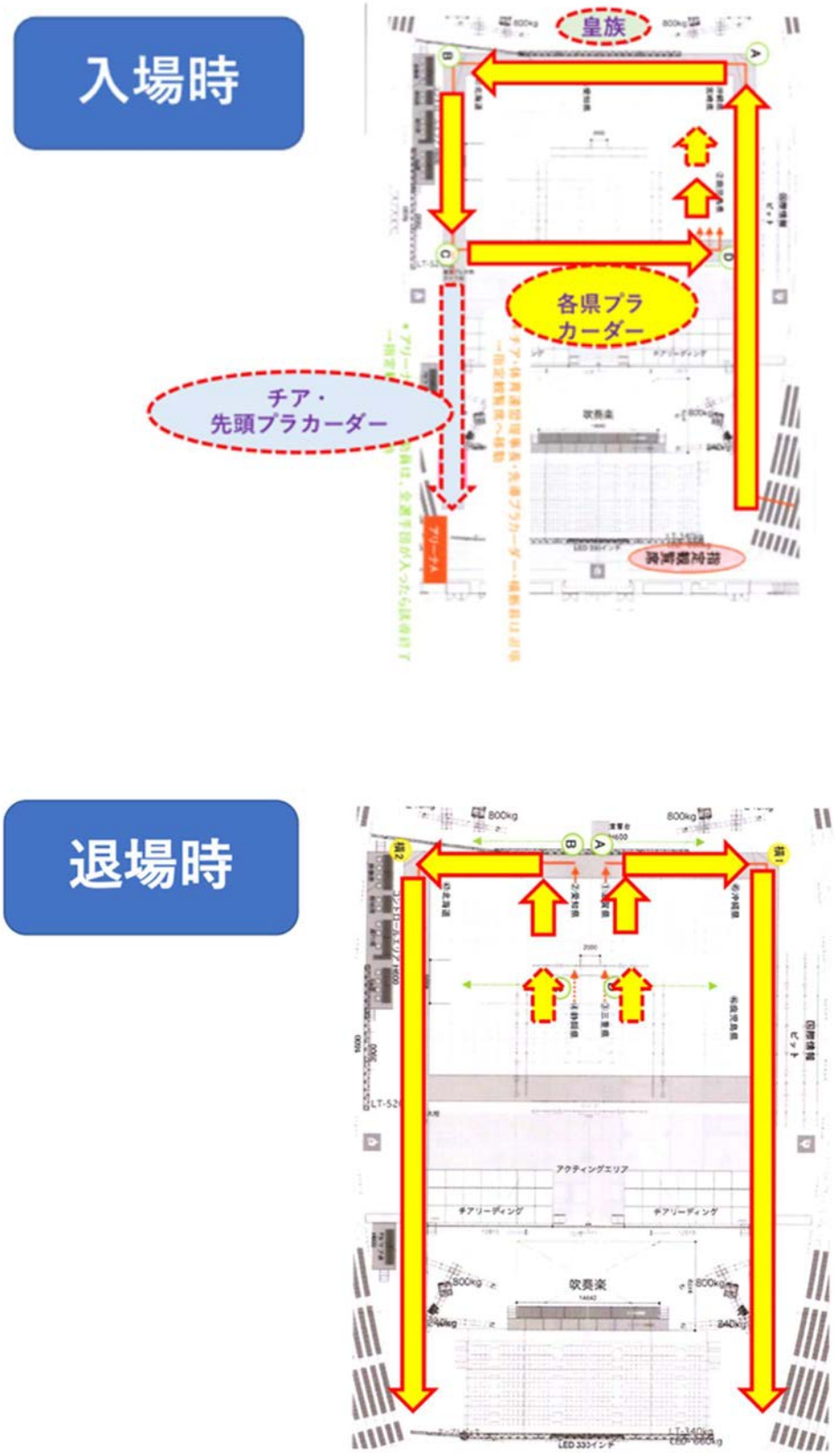


図３　開会式当日の入場・退場のルート

写真 19　歩行指導ポイントの検討風景

第２回プラカーダー養成研修会～歩行練習会編～（7/13(木)＠札幌国際大学）

研修会当日は、高校生はバスにて札幌国際大学に移動し、14 時頃から研修が開始した。研修会当日の主なスケジュールは下記のとおりである；１）スポーツボランティアに取り組むことの意義～スポーツビジネス的な観点から～、２）高校生の練習前の歩行様相の映像確認、３）歩行練習会。１）の企画については、スポーツビジネス業界での業務に長年従事した経験を持つ、本学スポーツビジネス学科長の平澤先生に講話を依頼し、２）、３）の企画については、粟野と札幌国際大学スポーツ人間学部学生が担当した。

１）の企画では、スポーツイベントのようなビジネスが成功するために、スポーツボランティアの存在がいかに重要であるかをご講話いただき、高校生が本ボランティアに参加する意義をさらに考究できるような内容であった（写真 20）。

写真 20

２）の企画では、7 月 3 日（月）に北海きたえーるにて実施されたプラカーダー養成研修会での活動の様相を収めた動画を活用して、歩行練習前の高校生の歩行の様相を確認してもらった（写真 21）。高校生には、３）にて実施する歩行練習にて意識すべきポイントについて、理解してもらった。

写真 21

動画を視聴し、プラカーダーの規定に基づいた歩行方法を理解した後、高校生はアリーナへ移動した。

歩行練習は、10 日（月）の事前リハーサル通りに進行することができた。はじめに、歩行時の姿勢のポイントについて説明を受けた後、その場足踏みにて歩行時の姿勢を確認した（写真 22）。歩行姿勢を確認し、直線方向への歩行練習を行った後、65cm 幅での歩行練習を実施した。この時、高校生は、床面に設置したアジリティラッツを頼りに、その距離感を確認した（写真 23）。数回の練習の後、高校生は良い姿勢でかつ適切な歩幅で歩行できている様相だった。次に、歩幅に加えて、1 分間に 120 歩のリズムでの歩行運動を学習した。スマートフォンアプリ（METRONOME-Tempo&Beat, Yamaha Corporation, Japan）にて生成された電子メトロノーム音（120 テンポ、4/4BEAT を使用）を頼りに、床面に設置したアジリティラッツをテンポよく跨いで歩行練習を行った。高校生は、直線方向への歩行では、歩幅・リズムともに十分に学習できた様子だった。直線方向での練習を終えた後、本番会場を想定した、周回コースを歩行した（写真 24）。周回コースでの歩行でも、直線方向での歩行練習にて学習した歩幅・リズムで歩くことができている様相だった。

大学生は、高校生の歩行の様相を撮影し、練習の合間にフィードバックを与え、コミュニケーションを図っていた（写真 25）。

歩行練習の終了後、本学阿井先生より、本番への心構えについてアドバイスがあった（写真 26）。高校生は、6 月と 7 月の研修にて学習した内容をふまえ、7 月 22 日（土）の本番にむけて、着実と準備を進めていくことができている様相だった（写真 27）。今後、高校生は、7 月 20 日（木）に行われるリハーサル（会場：北海きたえーる）にて、当日の動きを最終確認した後、本番を迎えることとなる。

写真 22

写真 23

写真 24

写真 25　大学生からのフィードバック（撮影しながらアドバイスを送る）

写真 26

写真 27

リハーサルの様相(7 月 20 日(土)＠北海道立総合体育センター北海きたえーる)

全国高校総体のリハーサルは、7 月 20 日（木）に、北海きたえーるにて実施された。当日のスケジュールを図 4 に示す。高校生は、9 時に北海きたえーる内総合情報館前に集合した後、2 階の中研修室に移動し、開会式当日の業務内容を示したマニュアルの読み合わせを行った。開会式当日の業務内容を把握した後、総合開会式を演出する担当ディレクターとの打ち合わせを行い、当日の詳細な動きを把握した。ディレクターとの打ち合わせが終了した後、ホワイエにて、プラカードを用いた行進練習を行った。

昼食休憩の後、サブアリーナに移動し、総合開会式会場にあたるメインアリーナでの行進練習に向けて待機した。サブアリーナでは、メインアリーナまでの入場経路の確認と、都道府県選手団別の入場順序の確認を行った。サブアリーナでの確認事項の終了後、メインアリーナでの行進練習を行い、入場経路・着席場所・退場経路の確認を行った。

サブアリーナおよびメインアリーナでの動きを確認した後、選手団の代役となるスタッフとともに、リハーサルを実施した。はじめに、サブアリーナにて、選手団の代役となるスタッフと高校生が顔合わせおよび段取りを打ち合わせした。代役スタッフと高校生との顔合わせおよび打ち合わせが終了した後、リハーサルに移行した。メインアリーナでは、本番を想定した配置となっており、ステージ上には来賓スタッフの代役が、ファンファーレや吹奏楽を担当する生徒が、スタンバイしていた。プラカーダーを担当する高校生は、開会式本番の雰囲気を想定した場面にて、入場するタイミング・入場経路・着席場所・式典の進行順序・退場経路を再確認することができた。高校生が一連の流れを確認し終えた時点でリハーサルは終了し、万全な状態で本番を迎えるに至った。

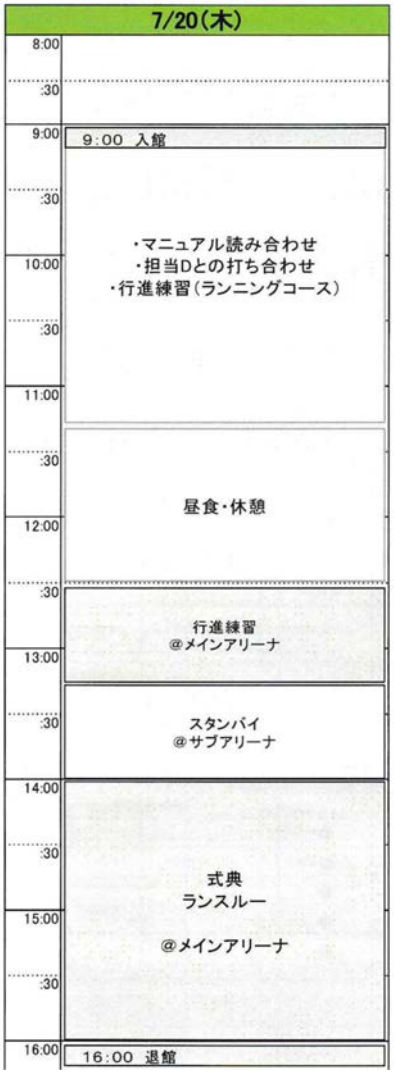


図 4　リハーサルのスケジュール

下記には、リハーサル時の活動の様相を示す（写真 28、29)。

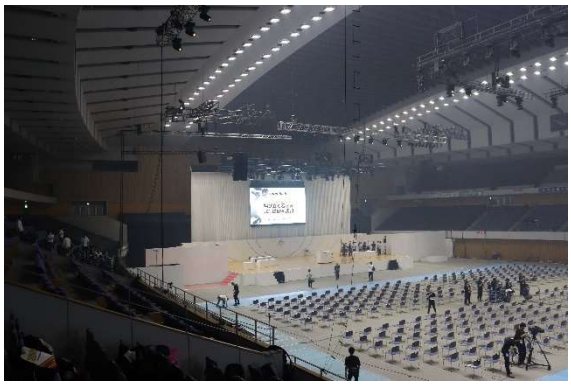


写真 28

福岡県

岡山県

大阪府

滋賀県

宮城県

北海道
岩手県

令和5年度全国高等学校総合体育大会 インターハイ

Interhigh
羽ばたく若き翼
北海道総体2023

写真 29

総合開会式の様相（7 月 22 日（土）＠北海道立総合体育センター北海きたえーる）

高校生は、総合開会式当日、7 時 30 分に北海きたえーる内にあるサブアリーナに集合し、業務内容の最終確認のレクチャーを受けた。その後、総合開会式に参加する選手団と顔合わせの上、リハーサルを行い、式典時の動きを確認した。

総合開会式の式典は、10 時から開式となった。開式通告のファンファーレの後、選手団が入場した。先導するチアリーダー、体育連盟理事長が入場した後、先導プラカーダーを務めた高校生から入場した。その後、各都道府県のプラカードを担当した高校生が順次、選手団の先導をきって入場した。都道府県の入場順序は、沖縄県から北上する順序で入場した。高校生は、研修プログラムやリハーサルで確認したとおり、堂々と歩行する姿が垣間見えた。また、アリーナ誘導の補助を担当した高校生も、リハーサル通り、業務を遂行する姿が垣間見えた。すべての都道府県選手団が入場した後、横断幕担当の高校生が会場を周回し、退場し終えた時点で、選手入場業務が終了した。高校生においては、総合開会式式典中の動きについても、リハーサルどおり取り組めており、式典業務に真摯に取り組む様子が垣間見えた。

閉式通告の後、式典演技が行われ、高校生は、選手団とともに、迫力ある演舞を堪能した。すべての式典プログラムが終了した後、会場の中央付近に着席した都道府県選手団から左右入り口に分かれて順次退場し、高校生は、プラカーダーとして、その選手団を先導した。退場業務が完了した後、プラカーダーは選手団に別れの挨拶を告げ、アリーナにて記念撮影を行い、全ての業務が終了した。すべての式典は、滞りなく進行し、終了を迎えることができていた。本番の様子は、下記に示す（写真 30、31）。

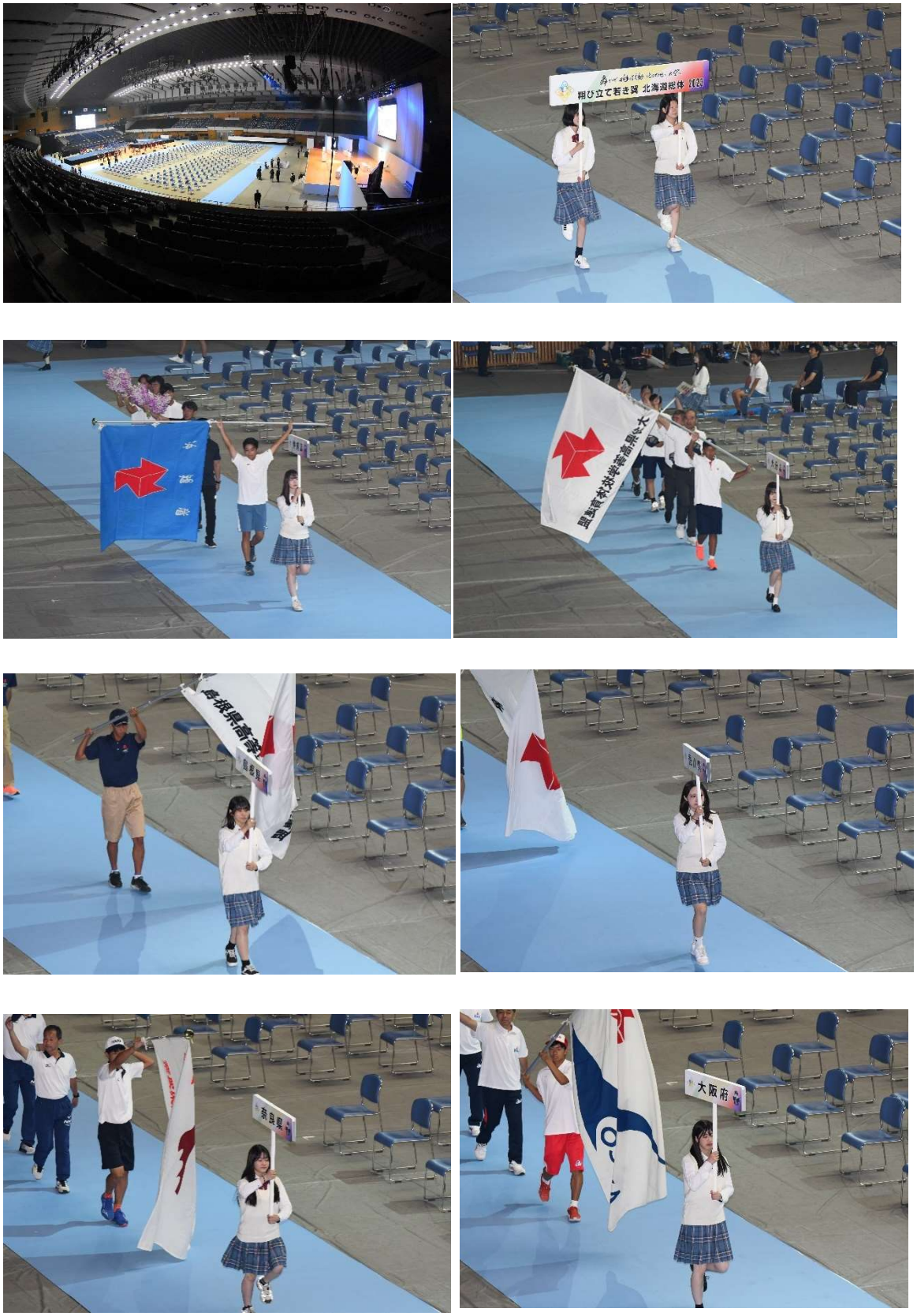


写真 30

写真 31

高校生のモチベーション向上の評価

高校生の研修参加前後のモチベーションの変化についての評価は、アンケートによる質問項目への回答に基づき行った。アンケートは、研修の事前・事後と、計 2 回行った。

事前アンケートは、計 2 回の研修プログラムを受ける前に、記入形式のもので行い、6 月 15 日（木）のプログラムの中で回答してもらった。回答項目は、ボランティアに参加したきっかけや不安なことなど精神的な面を問うものや、参加によって身につくと考えられることやその役割が持つイメージなど学習面を問うものなどが含まれた（下記参照）。

事後アンケートは、総合開会式での活動を含めたすべてのボランティアが終了した後に、QR コードによる電子入力式のアンケートに回答してもらった。アンケートは、依頼内容と QR コードを示した書類を高校側に送付し、回収する形とした。回答項目は、荒井と野嶋（2017）の評定尺度法を参考に、１）自己成長に関する回答項目 12 個、２）精神的高揚に関する回答項目 6 個、３）評価・承認に関する回答項目 3 個、の 3 つに分類し、それぞれについて 5 段階スケールのリッカード尺度にて回答してもらう形とした（図 5）。また、１）プラカーダー実施前後での心境変化について、２）大学生との研修機会に対する感想について、３）活動全体を振り返っての気づきや感想について記述形式にて回答してもらう形とした。

事後アンケートの 5 段階スケールの尺度については、回答分類ごとに、回答項目による評価点数の分布の差異を検討するために、χ^2 検定を用いた。全ての統計処理は、SPSS 19（IBM Japan, Japan）を用いて行った。有意水準は 5%未満とした。

高体連ボランティア事前アンケート

学年　　性別

ボランティアに参加しようと思ったきっかけは何ですか？

ボランティアにあたって不安なことは何ですか？

ボランティアを通してどんなことが身につくと考えていますか？

ボランティアは何のためにやると考えていますか？

プラカード入場ボランティア係についてはどんなイメージを持っていますか？

プラカード入場ボランティアの役割についてどのように考えていますか?

その他ボランティアについて知っていること等があれば自由に書いてください
(自由記述)。

全国高校総体2023 開会式ボランティア 事後アンケート

今回のボランティア参加を通して、身に付いた力や感じたことについて振り返り、
もっとも当てはまると感じるレベル(数字)を〇で囲んでください。

5 (良く当てはまる)・4 (当てはまる)・3 (どちらとも言えない)・2 (当てはまらない)・1 (全く当てはまらない)

1	自分自身が成長できた	5・4・3・2・1	
2	社会や人の役に立てた	5・4・3・2・1	
3	やる気や積極性を持って取り組めた	5・4・3・2・1	
4	人のために何かをする大切さを理解した	5・4・3・2・1	
5	自分の可能性を伸ばすことができた	5・4・3・2・1	
6	人とコミュニケーションする力を身につけることができた	5・4・3・2・1	自己成長
7	自分について見つめる機会を持てた	5・4・3・2・1	
8	新しい経験を通じて自信がついた	5・4・3・2・1	
9	自分の生き方に関する考えが変わった	5・4・3・2・1	
10	豊かな人間性が身に付いた	5・4・3・2・1	
11	自分の人格形成につながった	5・4・3・2・1	
12	自発性・自主性が身に付いた	5・4・3・2・1	
13	充実感を感じることができた	5・4・3・2・1	
14	やり遂げたという達成感を得ることができた	5・4・3・2・1	
15	皆で何かをする楽しさ・喜びを味わうことができた	5・4・3・2・1	精神的高揚
16	ボランティア活動自体を楽しめた	5・4・3・2・1	
17	やりがいを感じることができた	5・4・3・2・1	
18	自分自身について新しい発見があった	5・4・3・2・1	
19	人から感謝されたと感じる	5・4・3・2・1	
20	人から尊敬されていると感じる	5・4・3・2・1	評価・承認
21	学校・友人などから評価されたと感じる	5・4・3・2・1	

＊荒井・野嶋(2017)より改編
日本教育工学会論文誌 41(1), 97-108, 2017

プラカーダー実施前と比べてどのような気持ちの変化がありましたか(記入必須)。

大学生と一緒に練習してみていかがでしたか(記入必須)。

活動全体を振り返って感想や気づきについて記述してください(記入必須)。

図５　事後アンケートの回答項目について

事前調査の結果

事前調査の結果、57 名の高校生のうち 52 名の回答が得られた(91.2%)。回答の一部を表 1 に記す。ボランティアへ参加しようと思ったきっかけについては、「ボランティアに興味があった」、「楽しそうだったから」、「めったにできることではない」など比較的ポジティブなワードがみられた一方で、「上手にできるか」、「ミスをしないか」、「どう動けばいいかわからない」、「緊張して失敗しないか」などの不安要素や、「大変そう」、「難しそう」、「緊張する」などのネガティブなワードが多くみられた。また、ボランティアは「自分のため」、「社会のため」、「将来のため」、「周りや他人のため」などの回答から比較的強い参加意義を感じられていることや、「協調性」、「礼儀」、「積極性」、「責任感」、「行動力」、「自信」、「自発的に行動する力」が身につくと考えていると回答した高校生が多く、ボランティアへの参加について期待度の高さがうかがえた。

表１　　事前調査回答の代表

ボランティアに参加しようと思ったきっかけはなんですか	ボランティアにあたって不安なことは何ですか	ボランティアを通してどんなことが身につくと考えていますか	ボランティアは何のためにやると考えていますか	プラカード入場ボランティア係についてはどんなイメージを持っていますか	プラカード入場ボランティアについてどのように考えていますか	その他ボランティアについて知っていること等があれば自由に書いてください(自由記述)
やってみよかなと思った	初めてでやり方がわかってない	協調性	自分のため	緊張しそう	頑張って取り組みたい	
楽しそうだったから	失敗しないか心配	礼儀、協力	自分や人のため	かっこいい、真面目	とても大事な役割、失敗できない	
北海道で大会が行われると聞いて、人が足りなかったから	あがり症で心配性だから、緊張し過ぎてミスりそう	臨機応変に対応する能力	自分とインターハイに出る人達のため	真面目で堂々としているところ	選手を案内する人	見返りを求めず、自発的に
楽しそうだなと思ったから	本番緊張して練習したことがとんでいきそう	緊張から耐え抜く力、積極性	自分のため	大変そう	みんなを進める大事な役	
気になったから	当日しっかり動けるか不安	自分から積極的に行動するため	インターハイの選手のため	難しそう	とても重要な役割だと思う	
クラスで募集されていて、興味を持ったから	当日しっかり動けるか	行動力	インターハイの選手	選手の前に立って誘導させる	選手が迷わないようにする役割	
友人に誘われたから	上手くプラカードを持てるか	自信	自分	大変そう	プラカードを持つ	
久しぶりに北海道で開催されるということを聞いたこと	行動や仕事を把握できるか	自発的に行動する力	大会や選手のため	キビキビ動く	開会式の重要な仕事	
今後の人はできないから	上手くできるか	貢献の気持ち	人々のため	楽しそう	出る人の紹介の場で大切	ボランティアは人のためになるし楽しいし、良い経験
力になりたいと思った、積極的に自分から取り組むことが苦手な自分を変えるため	上手くできるか、失敗しないか	積極性	自分と人のため	大変、難しそう	緊張する	
ボランティアに興味があったから	足手まといになってしまうこと、失敗してしまうこと	人を支える力、自分に自信がつく	周りや他の人のため、自分のため	しっかりとしたイメージ	とても大切な役割	
高校生のうちに色々なことを経験しておきたいと思ったから	当日失敗しないかが不安		自分のため	きっちりかっこよくやらなくてはいけない係	代表だから恥ずかしくないよう頑張らないといけない	
野球部1年で参加しようとなったから	何をすればいいかあまり分かってないのでどう動けばいいか分からない	責任感	社会に貢献するため	とても目立ちそう	混乱しそう	
今までボランティアに参加したことがなかったので、1回は経験しようと考えたから	ミスしてしまうんじゃないかということ	人のことを考えるきっかけになる	自分のため、他の人のため	背筋が良い、ハキハキしている	入場する選手を導く役割	
興味があったから	当日で失敗すること	友達と離れて行動する勇気	未来の自分やインターハイに出る選手のため	しっかりしている	重要な仕事、難しそう	
楽しそうだったから	当日に失敗しないかどうか	広い視野で物事を考えられる	自分の考えを広げるため	目立つ訳ではないけど、大事な役割	楽しみたい、頑張りたい	
部活動でボランティアに参加することになったから	言われたことをすぐに出来ないので、みんなに迷惑をかけてしまいそう	感謝する心	人のためや、人とのつながるため	意外と重要な役割を果たしているイメージ	重要な役割なので、緊張感を持ってやりたい	
めったに出来ることではないし、新しいことに挑戦する良い機会だと思ったから	ちゃんと指示通りに動けるかどうか	積極的に挑戦する力	参加する人のため、自分のため	責任は大きそうだが面白そう	大変そうだがやりがいがありそう	
34年振りに北海道で行われるインターハイで中々関わることが出来ないし、やってみたいと思ったからです	本番うまくいくか不安です、どんな動きをするか分からない	誰かのために積極的に参加することで、積極性が身につくと思います	自分のため、相手のため、その場を成り立たせるため	緊張	楽しそう、手が震えそう	
友達が参加すると言っていたから	本番上手く出来るか少し不安	積極性、本番に強くなれそう	自分の成長	少し厳しそう	全国の選手の入場に大切な人	
友達に誘われた	失敗したらどうしよう	協調性が身につく	自分の将来のため	かっこいい	大会に出る選手を誘導する	
友人からの誘い	全部初めてなので仕事をやりこなせるか不安	自分から進んで何かをやる力	自分の成長	まっすぐ歩く、しっかりしてそう	頑張りたい	
誰かのために何か自分も手伝いたいと思ったから	自分のせいで失敗したらどうしようか	人との関わり、自分への自信	関わる人々のため	自分から進んでやるもの	選手の先頭に立って歩いていくから、自分が自信を持たないといけないと考えています	
一生に一度しかない体験だから	緊張して失敗しないか	人の役に立てるという自信	自分、社会	開会式という晴れ舞台を飾る	出場する人を誘導する	
友達に誘われて参加しようと思った	本番ミスするかもしれない	プラカードの姿勢	参加している選手、運営、自分のため	姿勢が良い	重要な役割なので、緊張感を持ってやりたい	
貴重な体験ができると思ったから	失敗せずにプラカードを持てるか不安	積極的に考え、動く力	自分のため	失敗できないイメージ	とても重要な役割だと思う	

事後調査の結果

事後アンケートは、57 名の高校生のうち 37 名から回答が得られた（64.9%）。

図 6 には、自己成長に関する回答項目についての結果を示す。すべての質問項目について、「よく当てはまる」か「当てはまる」と回答した割合は、約 90%以上を示しており、項目間の分布に有意差は認められなかった。

精神的高揚に関する回答項目の結果を、図 7 に示す。いずれの質問項目についても「よく当てはまる」か「当てはまる」と回答した割合は、約 95%以上を示した。特に、「充実感を得ることができた」、「やり遂げたという達成感を得ることができた」、「皆で何かをする楽しさ・喜びを味わうことができた」、「ボランティア活動自体を楽しめた」の項目については、2 つの尺度を合わせて 100%の割合を示した。項目間の分布には、有意差は認められなかった。

図 8 には、評価・承認に関する回答項目についての結果を示す。「人から感謝されたと感じる」の項目については、「よく当てはまる」か「当てはまる」と回答した割合が約 90%以上を示した。「人から尊敬されていると感じる」や「学校・友人から評価されたと感じる」の場合は、「よく当てはまる」か「当てはまる」と回答した割合が約 80%前後であり、それ以外の回答割合が約 20%程度であった。「人から感謝されたと感じる」の分布は、他の項目の分布と比較して有意差が認められた（$p < 0.01$）。

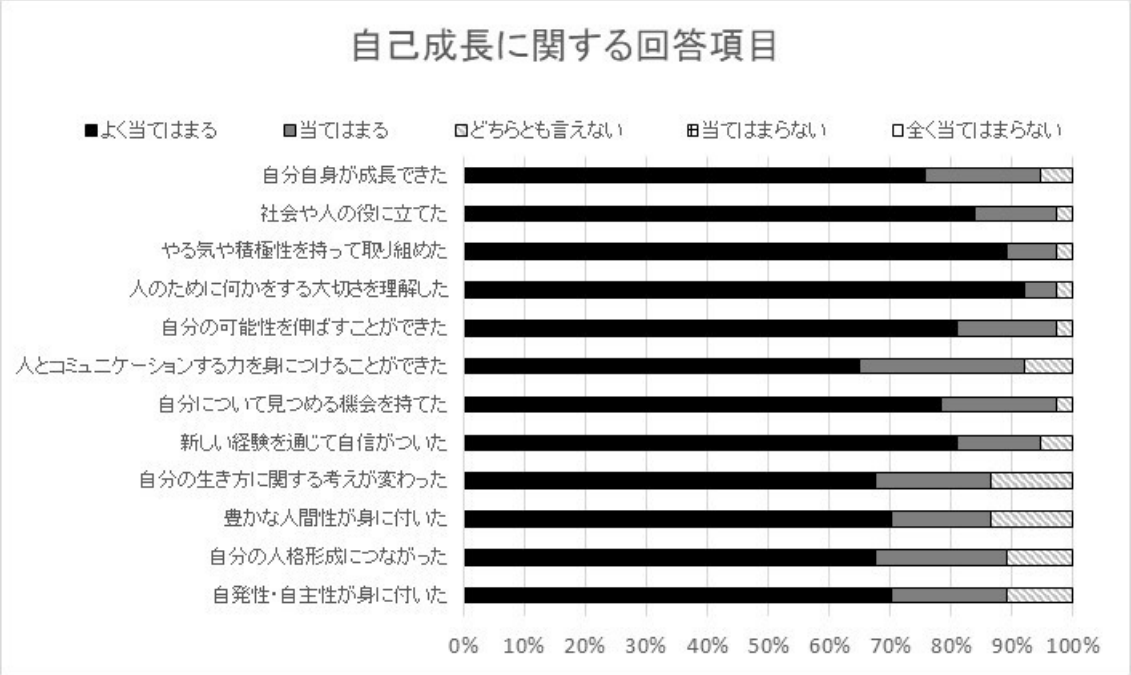


図 6　自己成長に関する回答項目の結果

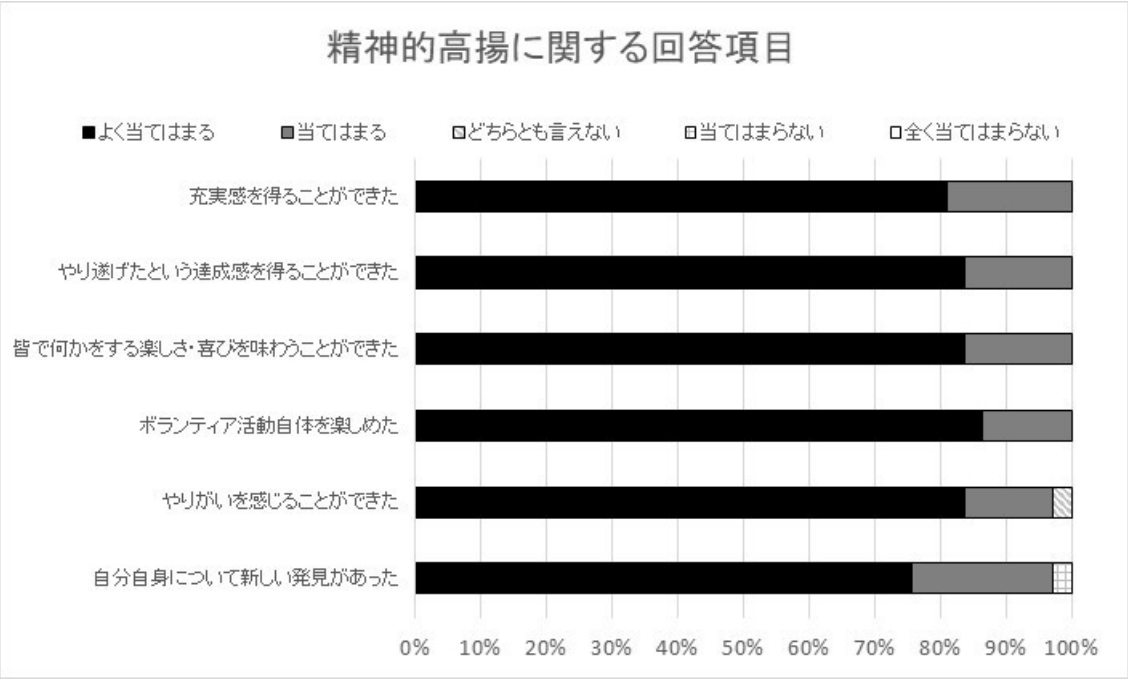


図 7　精神的高揚に関する回答項目の結果

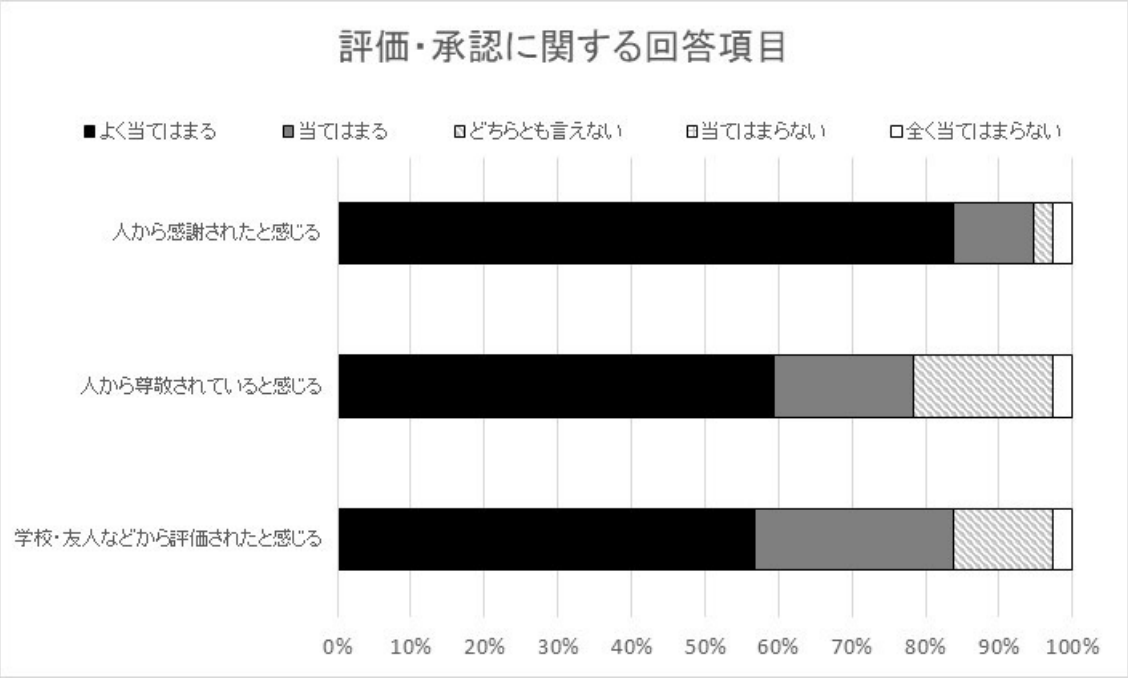


図 8　評価・承認に関する回答項目の結果

次に、事後アンケートの記述回答についての結果を下記に示す。いずれの回答欄においても、活動に対する否定的な言葉を用いた記載が認められなかった。

表 2 には、プラカーダー実施前後での心境変化についての記述回答一覧を示す。「ボランティア活動に興味がなかったが、今後は積極的に参加してみたいと感じた」、「実施前は面倒くさかったが、活動後はやりがいを感じてよかった」、「軽い気持ちで始めたが、人のために何かすることは良いことだと感じた」、「何かに挑戦することを怖がらずにできるようになった」旨の回答などが得られた。

表 3 には、大学生との研修機会に対する感想についての記述回答一覧を示す。「頼りになってよかった」、「とてもためになって、楽しい経験となった」、「説明の仕方が上手く、学びを得た」、「経験のある方と一緒に練習ができて、気持ちの向上につながった」旨の回答などが得られた。

表 4 には、活動全体を振り返っての気づきや感想についての記述回答一覧を示す。「自信につながったし、色々なことが経験できた」、「ボランティアで身も心も成長できた」、「陰で人を支えることは大変だが、その分多くの人に感謝される良い仕事だと思った」、「これからもいろいろなボランティアに挑戦してみたい」、「挑戦の大切さがわかり、成長できてよかった」、「何事にも挑戦してみることで今後の自分の夢とかにつながっていくと感じ、今後も興味のあることとかに挑戦していきたいと思った」、「誰かのために努力する大切さや、ひとつの式がたくさんの方々の協力で成り立っていることを実感してとても多くのことを学ぶことが出来た。今後もこういったボランティアに積極的に参加していきたい」旨の回答などが得られた。

表２　プラカーダー実施前後での心境変化についての記述回答

No.	学年	性別	プラカーダー実施前と比べてどのような気持ちの変化がありましたか(記入必須)。
1	高校2年生	男性	誰かの役に立てるという自信がついた
2	高校2年生	女性	なにかのボランティア的なことが楽しいと思えた
3	高校3年生	女性	最初から自信がありました！とっても楽しかったです！
4	高校2年生	女性	自分に自信がついた
5	高校1年生	男性	さまざまなスポーツに関心を持てた
6	高校1年生	男性	自分も社会に貢献できる人間だと思いました
7	高校1年生	男性	インターハイについて興味を持てた
8	高校1年生	男性	ボランティアに今まではあまり興味がありませんでしたが今回の行事によってこれから積極的にこーいうことに参加していこうと思いました
9	高校1年生	女性	緊張に強くなった
10	高校1年生	男性	実施前はめんどくさかったがやってみるとやりがいがあってやって良かったと思った
11	高校1年生	女性	人の役にたつことが楽しいと感じることができた
12	高校1年生	男性	実施前は自分が役に立てるか分からなかったがこの仕事が多くの人に感謝される事を知り自分に自信が着いた
13	高校1年生	女性	積極的に活動することが増えた
14	高校3年生	女性	楽しかった
15	高校2年生	女性	たのしかった！
16	高校2年生	女性	ボランティアが楽しいとわかった。
17	高校2年生	女性	ボランティア活動をすることは楽しいと思った。
18	高校2年生	女性	積極的に取り組むことが出来た
19	高校2年生	女性	達成感があった
20	高校2年生	女性	実施前よりボランティアに対する感心が深まりました
21	高校2年生	女性	何かを挑戦することを怖がらずできるようになりました。
22	高校2年生	女性	たのしい
23	高校2年生	女性	いろんな人と関われてコミュ力成長した
24	高校1年生	女性	人の役に立てた
25	高校2年生	女性	最初は軽い気持ちで始めたけど、このボランティアの活動を通して、人のためになにかをすることはいいことだなと感じるようになった。
26	高校3年生	女性	以前より、積極的に自分から行動できるようになりました
27	高校1年生	女性	何事にも積極的に挑戦したいなと思うようになった
28	高校1年生	女性	人の為に尽くすことを楽しく感じるようになった。
29	高校2年生	女性	もっとボランティアをしたいと思った
30	高校2年生	女性	自分の任された仕事に対する責任感を強く持つようになりました。
31	高校2年生	女性	はじめは自分にできるかと不安でしたが練習をしていくうちに自分でもできるんだと自信がつきました
32	高校3年生	女性	とくになし
33	高校1年生	女性	最初は私がやっても大丈夫か心配だったけどやってみて普段関わらない人と沢山関わることが出来たのでやってよかったし、自分の自信につながりました。
34	高校3年生	女性	最初参加したときは興味半分で参加していましたが、プラカーダーの活動を通してものすごい達成感を感じることができました。
35	高校3年生	女性	誰かをただ応援するだけではなく、自分も応援するための努力をして全力で応援し、送り出すことに以前より満足感や達成感を得られるようになりました。
36	高校2年生	女性	ボランティアの楽しさがわかった
37	高校2年生	女性	誰かのためになにかをやろうと思う気持ちになれた。

表３　大学生との研修機会に対する感想についての記述回答

No.	学年	性別	大学生と一緒に練習してみていかがでしたか(記入必須)。
1	高校2年生	男性	頼りになってよかった
2	高校2年生	女性	とてもたのしかった！
3	高校3年生	女性	とてもタメになったし楽しい経験になりました！
4	高校2年生	女性	楽しくて、すごく勉強になった
5	高校1年生	男性	大学生のようになりたいと感じた
6	高校1年生	男性	緊張しました
7	高校1年生	男性	優しく教えてくれて楽しかった
8	高校1年生	男性	教え方もすごく優しくてわかりやすかったので楽しい思い出になりました
9	高校1年生	女性	説明の仕方が上手く学びを得た
10	高校1年生	男性	楽しかった
11	高校1年生	女性	楽しく望むことが出来ました
12	高校1年生	男性	年の離れた人と接することでいろんな考え方が身に付けて良かった
13	高校1年生	女性	大学生の皆さんがとても優しくしてくださり、緊張なくリラックスして練習から本番まで挑むことができました
14	高校3年生	女性	良かった
15	高校2年生	女性	たのしかった！
16	高校2年生	女性	楽しかった。
17	高校2年生	女性	楽しかった。
18	高校2年生	女性	楽しかったし、自分もこうなりたいと思った
19	高校2年生	女性	分かりやすくて楽しかった
20	高校2年生	女性	どうしたらもっと良くなるかを優しく教えてくれて嬉しかったです
21	高校2年生	女性	みなさんとても優しく緊張をなるべくしないように気を使ってくださってとてもありがたかったです。
22	高校2年生	女性	たのしい
23	高校2年生	女性	まなべることがおおかった
24	高校1年生	女性	緊張したけど楽しかった
25	高校2年生	女性	歩き方など一緒に歩いて練習できてよかった。
26	高校3年生	女性	普段高校生活の中で大学生と関わることはあまりないので関わることが出来てとても良かったです。
27	高校1年生	女性	年上のいろいろな人と交流出来て、歩くコツとかも掴めてよかった
28	高校1年生	女性	経験がある方と一緒に練習出来て、気持ちの向上に繋がった。
29	高校2年生	女性	あんまり年上の方と関わることは得意じゃないけれど楽しく話すことが出来た
30	高校2年生	女性	一度、ブラカーダーを経験した事のある先輩から詳しい指導を受けれて参考になりました。
31	高校2年生	女性	楽しくできました。話し合いのときなどたくさん考えがでてきてこういう考えもあるんだと思ったところもありました
32	高校3年生	女性	たのしかった
33	高校1年生	女性	関わる機会が普段はなかなか無いので一緒に練習をしたり、交流が出来てよかったなと思いました。
34	高校3年生	女性	大学生の方々からアドバイスをもらったり、様々な話をすることができてとても有意義な時間を過ごすことができて良かった。
35	高校3年生	女性	当たり前ではありますが自分よりも年上の方々で、話の進め方や誘導の仕方など学ぶことが出来る点が多くありました。
36	高校2年生	女性	楽しかった
37	高校2年生	女性	たのしかった。

表４　活動全体を振り返っての気づきや感想についての記述回答

No.	学年	性別	活動全体を振り返って感想や気づきについて記述してください(記入必須)。
1	高校2年生	男性	自信にも繋がったし、色々なことが経験できた
2	高校2年生	女性	勢いで応募したけど、とてもいい経験になった
3	高校3年生	女性	すごくすごく楽しかったです！
4	高校2年生	女性	貴重な経験ができた。
5	高校1年生	男性	ボランティアで身も心も成長できた
6	高校1年生	男性	いい経験もさせていただけました
7	高校1年生	男性	人のためになることができたと感じた
8	高校1年生	男性	貴重な経験をさせてもらってこれからの生活にもこのボランティアを活かせていけたらいいなと思いました
9	高校1年生	女性	人を応援することは素晴らしいと思った
10	高校1年生	男性	人のために何かするのはとても楽しい
11	高校1年生	女性	なかなかできない経験だと思うので担当できて良かったです
12	高校1年生	男性	影ながら人を支えることは大変だがその分多くの人に感謝されるとても良い仕事だと思った
13	高校1年生	女性	北海道の色々な高校が集まってインターハイの開会式を行っていてとても素敵な空間だと感じました
14	高校3年生	女性	とても良かった
15	高校2年生	女性	たのしかった！
16	高校2年生	女性	楽しかった。
17	高校2年生	女性	楽しく活動できてよかった。
18	高校2年生	女性	参加してほんとに良かったと思えた。貴重な経験になって思い出に残った
19	高校2年生	女性	色々な人と関わることができて良かった。
20	高校2年生	女性	ボランティア自体は2回目だったけど1回目は小学生の時だったので1回目よりもっと積極的に取り組むことができました。これからも色々なボランティアに挑戦してみたいと思いました
21	高校2年生	女性	今回プラカーダーができたことはとても誇りに思うし、普段絶対に関わりのない他県の人と交流ができてとてもよかったです。良い経験になりました。
22	高校2年生	女性	たのしい
23	高校2年生	女性	達成感がすごくあった
24	高校1年生	女性	いろいろな人と関われてよかった
25	高校2年生	女性	ボランティア活動は気持ちがいいなと思った
26	高校3年生	女性	学年関係なく色々な人と一緒にボランティア活動ができていい経験になりました。
27	高校1年生	女性	挑戦って大事だな思った 今回挑戦してみていろいろなことを学べて成長出来てよかった
28	高校1年生	女性	人を応援することはとても大事なんだと感じた。
29	高校2年生	女性	またこういう機会があればやってみたい
30	高校2年生	女性	プラカーダーの仕事をするのが初めてでとても新鮮でした。やりがいがあり、何より楽しかったです。
31	高校2年生	女性	はじめてボランティアに参加しました。 人の役に立つことの嬉しさに気づきまたやりたい！と思いました。
32	高校3年生	女性	たのしかった
33	高校1年生	女性	最初は不安だったけどやってみたら失敗してしまうこともあったけど最後は成功に終わったのでよかったなと思いました。何事にも挑戦してみることで今後の自分の夢とかにつながっていくんだなと感じ、今後も興味のあることとかに挑戦していきたいなと思いました。
34	高校3年生	女性	プラカーダーの活動を通して、自分にとってとても良い経験になりました。この経験を活かせられるようにしたいと思います。
35	高校3年生	女性	誰かのために努力する大切さや、ひとつの式がたくさんの方々の協力で成り立っていることを実感してとても多くのことを学ぶことが出来ました。今後もこういったボランティアに積極的に参加していきたいです。
36	高校2年生	女性	ボランティアの大切さ気づいた
37	高校2年生	女性	ボランティアって大事！！！！！

まとめ

事後アンケートの回答率は、64.9%であり、全参加者から回答を得ることができなかった。そのため、以下には、得られた回答内容をもとに活動の成果を記述する。

我々が実施した研修プログラムを経て、総合開会式のプラカーダーボランティアに参加した高校生の約 90%が、事後アンケートにおける自己成長に関する質問項目に対して、肯定的な回答を示した。特に、自分の可能性を伸ばすことができたことや、新しい経験を通じて自信がついたことのような、高校生自身の成長につながる項目で肯定的な回答率が高かった。さらに、人のために何かをする大切さに気がつくことや、人とコミュニケーションする力を身につけたことなど、高校生自身の社会性の形成を実感する項目でも肯定的な回答率が高かった。回答項目の比率から、今回の活動が、高校生にとって、自己成長を実感したことによる満足度と、社会性を身につけたことを実感したことによる満足度が高かったものと考えられる。

精神的高揚に関する質問項目に対しては、すべて 100%に近い肯定的回答が得られた。回答項目の比率から、高校生は、今回の活動のような非日常的な体験を通じて、自己成長や社会性を身につけたことにより、自分自身について新しい発見をすることができ、充実感を得ることができたものと考えられる。また、皆で何かをする楽しさや喜びを味わい、やり遂げた達成感を得ることができたことで、やりがいを感じ、ボランティア活動自体を楽しめたものと考えられる。

一方で、人から感謝されたと感じる高校生は 90%以上を占めたが、人から尊敬されたと感じる割合や、友人から評価されたと感じる割合は、若干低い傾向だった。記述回答をみると、否定的な言葉を用いた回答を示した高校生はいなかった。むしろ、「ボランティア活動が、興味がない印象から、積極的に参加してみたいものに変化した」旨の回答や、「何かに挑戦することを怖がらずにできるようになった」旨の回答など、肯定的な言葉を用いたものが多数を占めた。このことから、高校生は、外部評価よりも、自身の内面的な成長に対して充実感を感じ、結果として今回の活動に対する満足度が高くなったと考えられる。

大学生との研修機会についても、経験のある学生と一緒に活動ができて参加に対する意欲向上につながった旨の回答や、ためになった旨の回答があった。さらには、活動自体を楽しく行えた旨の回答が多く得られた。クレショフ（1922）は、前後の文脈で与えられた情報により、様々な事象に対する知覚の仕方が異なることを報告している。このことから、ボランティア活動の経験を通じて自身の成長を実感したことのある大学生が指導役に関わったことで、高校生にとって、ボランティア活動そのものが肯定的な事象として印象付けることができたものと考えられる。

1998 年に学習指導要領の中で、道徳・特別活動の中にボランティアが位置づけられて以降、ボランティア活動は、①学問の体系に基づく知識・技能の習得を重視するものと、②社会的経験に基づく問題解決学習を重視するものと捉えられ（池田、2007）、多くの児童生徒が参加している。今回のプラカーダーボランティアの活動は、競技者として参加する全国の高校生がより良い活動が行える

ようおもてなし、激励する意味合いが含まれている。ボランティアに参加する高校生の教育的な観点を考えると、高等学校学習指導要領の道徳の目標にあるように、道徳的実践力を高めるとともに、自律の精神及び社会連帯の精神並びに義務を果たし責任を重んずる態度を養うことにつなげることが今回の活動のゴールである。実際に参加した高校生の様相から、今回の活動は、自律的にかつ責任感を持って業務を全うし、自己の向上を図る場面が垣間見えた。また、友人とともに活動することを通じて人間関係を深め、集団の中で自分の役割を自覚して意欲的に貢献する姿がみられた。

以上のことから、今回のボランティア活動が高校生に与える教育的意義は十分なものであり、これらの活動に一助を与えた本研修プログラムは高校生にとって意味のあるものとなったと思われる。

参考文献

荒井俊行、野嶋栄一郎（2017）大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌 41(1)：97-108

Castaneda,B, and Gray,R(2007) Effects of Focus of Attention on Baseball Batting Performance in Players of Differing Skill Levels. Journal of Sport & Exercise Psychology, 2007, 29, 60-77

コールズ R（1995）ボランティアという生き方（池田比佐子訳）. 朝日新聞社、大阪

藤原勝夫（2011）姿勢制御の神経生理機構. 杏林書院、東京

Guay,Senécal,Gauthier, Fernet（2003） Predicting carrier indecision: A self-determination theory perspective. Journal of Counseling Psychology,50, p.165-177.

Gurfinkel VS, Lipshits MI, Mori S, et al. (1976) Postural reactions to the controlled sinusoidal displacement of the supporting platform. Agressologie, 17: 71-76

池田幸也（2007）学校教育とボランティア活動のディレンマ. ボランティア学研究 7：5-23

伊藤豊彦（2004）スポーツ心理学ーその軌跡と展望 大修館書店 pp.33-54

国立青少年教育振興機構（2021）高校生の社会参加に関する意識調査報告書―日本・米国・中国・韓国の比較―. 「体験の風をおこそう」運動

Kunita K, Fujiwara K, Kiyota K, Anan K, Kaida C (2011) Trunk and pelvis inclination movement angles in the frontal plane in single stance phase during stepping in place. Health and Behavior Sciences 9(2): 101-106

Losier,Perreault,Koestner, Vallerand（2001）Examining individual differences in the internalization of political values: Validation of the self-determination scale of political motivation. Journal of Research in Personality,35, p.41-61

Massion J (1992) Movement, posture and equilibrium: interaction and coordination. Prog Neurobiol, 38: 35-56

深山元良（2013）体育・スポーツにおける動機づけ研究の展望 城西国際大学紀要経営情報学部第21巻第2号 pp.127-143

中村隆一、斎藤宏、長崎浩（2012）基礎運動学 第6版補訂. 医歯薬出版株式会社、東京

西田保（2013）スポーツモチベーション ～スポーツ行動の秘密に迫る！～ 大修館書店 pp.120-132

岡田涼（2010）自己決定理論における動機づけ概念の関連性-メタ分析による相関係数の統合- パーソナリティ研究 2010 第 18 巻 第 2 号 p.152-160

大山正、今井省吾、和気典二（1994）新編感覚・知覚 心理学ハンドブック. 誠

信書房、東京
Paillard J (1960) The patterning of skilled movements. In: Field J ed., Handbook of Physiology, Section 1: Neurophysiology. pp1679-1708, American Physiological Society
Perry J, Burnfield JM (2010) Gait Analysis: Normal and Pathological Function (2nd ed.). Slack Incorporated, California
Ryan RM, Deci EL (1985) Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior. New York : Plenum Press.
Ryan RM, Deci EL (2000) Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions and New Directions *Contemporary Educational Psychology25* pp.54-25
鈴木一之 (2020) 陸上競技のコーチング学 大修館書店 pp.50-51
内海成治、中村安秀 (2014) 新ボランティア学のすすめ一支援する／されるフィールドで何を学ぶか. 昭和堂、京都
Vallerand RJ, Ratelle CF(2002) Intrinsic and extrinsic motivation: A hierarchical model. Handbook of Self-Determination Research. University of Rochester Press. pp. 128-37
Wang CKJ and Biddle SJH (2001) Young people’s motivational profiles in physical activity: A cluster analysis. Journal of sports & exercise psychology, 23, p.1-22.
ワークショップ体験部 (2020) 今日から使えるワークショップのアイデア帳　会社でも学校でもアレンジ自在な 30 パターン. 翔泳社、東京